

357-304



1200501411163

357

304



始



389

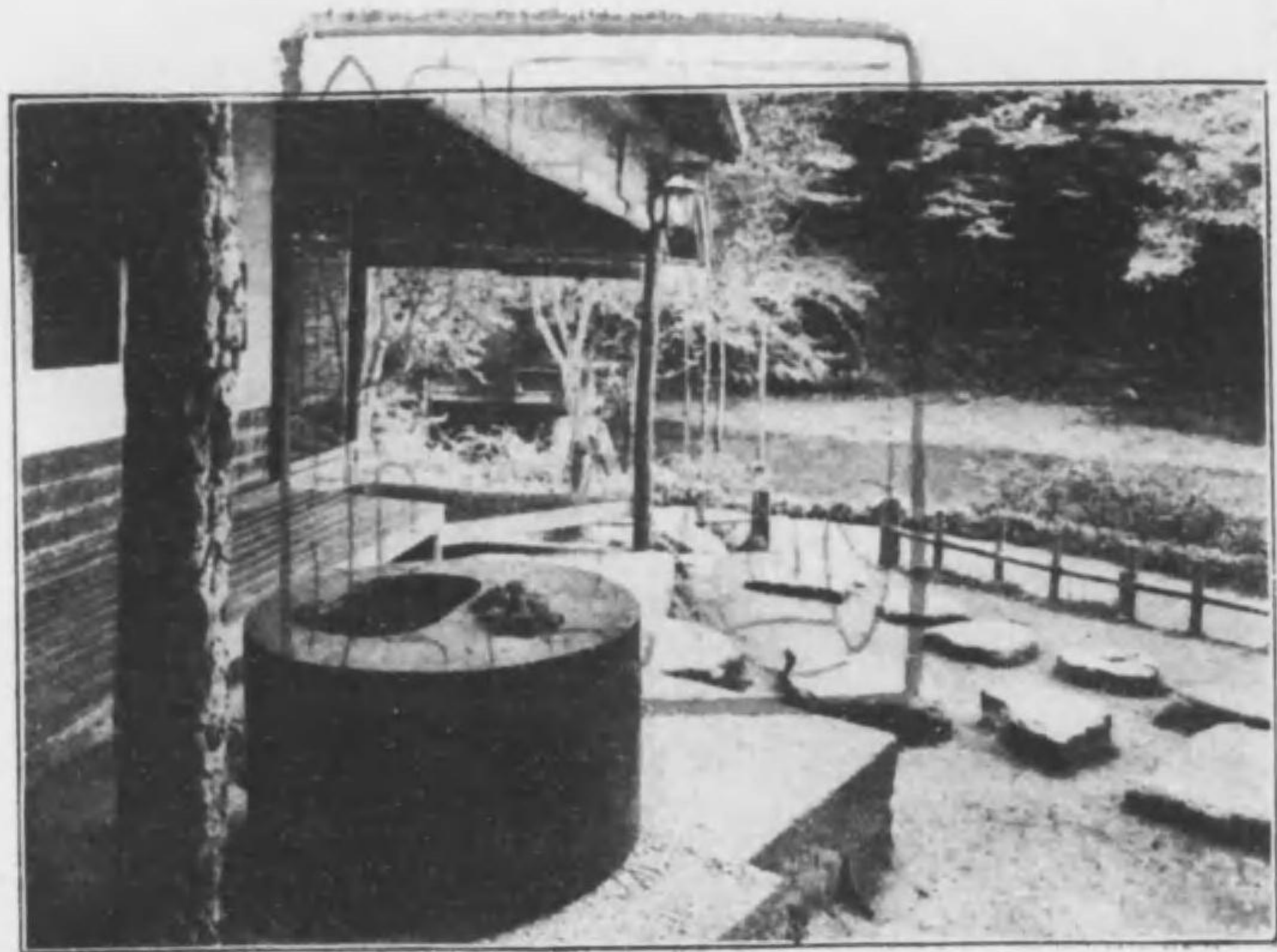
徳
と
木

武
藏
野
書
院

福

と

本



室生年屋著

徳と木

昭和五年九月出版

東京
志士の



357-304

序

庭と木、
 庭と木の一卷まき、
 庭の置露、
 そして僕はこれで夏の霜をつくらふとするのだ、
 わが庭と木を美しくするために、

著者識

緑を拜む心 七

築庭雑話 一〇

田舎の庭 一〇 草木木石と私 一一

石 一九 築庭の心 二二

石一つ(詩) 二七

石に就て 三〇

竹の柱の記 三九

庭 四五

つくばい 四五 石の相 五二

竹の庭 六〇 夏の庭 六七

垣根 六四 冬の庭 七七

田端の里 一三三

記録 一三六

別れ 一九

曇天的な思想 一二二

織部の角燈籠 一三六

梅と硝子戸 一三七

牡丹 一三八

鶏頭 一三〇

名園の落水 一三一

菊に就て 一四

木藤の庭 八五

六窓菴 八九

廢園 九二

小栗風葉の庭 九五

深夜の庭 九六

みかんの木(詩) 一〇一

寒竹(詩) 一〇三

憂鬱なる庭 一〇四

童子の庭 一〇七

季節の痴情 一一〇

美玉の王 一五二

寒菊 一五四

水仙花 一五七

つるもとき 一五九

至聖林 一六二

寒竹 一六三

冬すみれ 一六五

再び竹に就て 一六七

野茨の實 一七一

縁を拜がむ心

まだ東京の裏町に住んでゐた時分、朝なんぞ入浴したあとで青青した新緑の木の姿をみると能く尊とい氣もちになる。何一つ買ひもできなければ又何一つ喜ばしいことのなかつた故か、青い木の姿をゆつくり眺めてゐるだけでも仕合せな氣もちになつた半ば嘆くやうな氣もちでいいなと思ふときに、自分の暮し向きの不如意まで手傳つてゐるにかかはらず、それ故に尊といいい氣もちになつた。駒込千駄木町の下宿のとなりは赤門寺だつた。そこに椎と楓の木があり青い縁をつけたのが、窓一杯に冷たい縁の姿をもしひろげた。わたしは角の食パンをかじりながら、全く、拜みたいやうな感傷的な氣もちで毎朝それをながめてゐるうち、すこし氣障な言ひ分だが、何か佛像めいたものが、朝日の光のうちに含まれてゐるやうなそれを屢々感じた。貧乏してゐたからでもあらうが、實際わたしには縁を拜むといふ氣もちが、花を愛するそれ以上に

烈しかったかも知れないと思つた。

それから十年後のいまのわたしは、新緑にたいする氣もちに未だその拜む氣もちが残つてゐるのを不思議に感じてゐる。すると或ひはこれは一生この氣もちを繰り返してゆくのかも知れないと思つた。人間は新鮮な感情にありつきたいために何度も追慕したり何度も惚れたりするが、やはり結局は何度も戀をしたりしても、自分の氣質に歸つて来て、れいの縁を拜むやうになるのであらう。

いま、わたしの眼前に迫つてゐるのは、美しい緑の木の姿が朝日の中にある。——それは何十年來見なれて来たそれである。その何十年來見なれて来た縁の木にわたしは自分の心をくり返して考へて見ると、わたしは既に衰弱をかんじてゐる。若い時分のやうにかつとしてその木に飛びついてまで感激するそれではない。靜かに坐つたままで、ゆつくりと自然に、

「なるほど！」

と、さうやはり美しいものに見とれるのだ。そしてやはり先刻の、拜みたいやうな氣もちになる。二十のところ、美しい人の前でやはり拜みたいやうな氣がした。いまはそれは失くなつたが、木の姿には一生拜みたい氣もちがつづくであらう。

空あかり幹にうつれる木芽かな

築庭雑話

田舎の庭

私は國の方に或土地を借り入れ見窄らしくはあるが一つの庭園を持つてゐる。庭園と名付けられるものかどうかは疑はしいが、それでも石や樹が少しばかりと小さい流れもある。今年の秋も行きたいと思ひながら暇がなかつた。毎年一度しか行けないから手入れも行届かないで、徒らに風霜に玩ばされて荒れてゐるばかりである。此頃就々思ふことは何故東京にその庭を作らなかつたかと稍々後悔に似た氣持になつてゐる。私どものやうに原稿を書いて渡世してゐるものには、田舎に住むことは不便でもあり人から忘れもし、又子女の教育も東京でしなければならぬから、事情からはもう田舎に用事は無い筈である。それよりも東京に小さな家を作り、それに應じた庭を案じた方がどれ程實際的だか知れなかつた。庭などといふものは四季を通じて住む處に

あつてこそその布置や結構、樹木の手入れや石の打ち方に心を委ねることが出来るが、東京から一晩かかる田舎では急に行きたくとも却々俗事の爲出掛られぬ。従つて平常考へてゐる事の半分をも其庭に加へることが出来ない。

自分のやうな文學的渡世者は、多分貧乏する時を豫期することがある程、又賣文者の運命を信じてゐることが出来る程、なほ東京にゐて生活した方がその貧乏をも堪へられはするが、田舎の暮しでは全然貧乏することが土地の事情からして許されない。田舎で貧しい暮しをする事は身を切られるよりも口さがなく辛いことだらけである。さういふ田舎に庭や家を作るよりも、同じ貧乏暮しをするならば東京にゐた方がよいやうに思はれるのである。東京はどういふ貧乏をも忍ぶことが出来、貧乏人の住めるやうに諸式が安價に出来上つてゐるからだ。萬一吾々に文運のない時を不幸にして経験する時があつても、東京に住んでゐたら時雨の鍋に豆を煎り、夜寒の卓の上に淨菜の汁をすゝることに何等慮するところはないであらう。併しながら郷關に母や其他の親類

の者共とわたら、吾々はさういふ簡単なことはしてゐられない。相應の見榮があり貧乏をさへ蔽ふやうな心持である。又東京に居れば詩や小説の稿を携へて窮陋の資を得るために、高層樓上の編輯子を訪ねる便宜はあるが、田舎にゐては此の一途の明りさへ失はれる譯である。世上文運無き輩に取つて又時には雨の中に泥濘に惱され乍ら出掛けることは、その事が既に蕭條の秋衣を打つ風流のすさびでなければならぬ。文を賣らんとして市に出てゆく者は均しく大雅の心得ある者であつてこそ、初めてその文をも賣ることを得るのであらう。天地に恥ぢることなき詩情に眼鏡どき輩にとつて、文を賣らんとすることは寧ろ名譽であつても卑屈ではないやうである。斯る風流と便宜とは田舎で暮してゐては、時を興へられぬと同様である。自分が郷里に家を有たうとする考へをあやぶんだのも又一理なきにあらずである。

草本木石と私

自分は最初その小さい庭を作つた動機は、矢張り田舎に落ちて行く日のことや、老後や天災の考へが無いでもなかつた。それに郷里特殊の樹木に、親愛の情を持つ自分はそれを己れのものとして、時折眺めたい野心をもつてゐたからである。國へ行くごとに東京では見られぬ稀らしい樹々の姿に、例令ば冬冴える實の美しい枝を人の家の塀の上に眺めたり、又は東京に少ない梅の老木の品の高いのを見るごとに、それを己れの庭に置いて眺めたらといふ氣持になり、諦め兼ねる昂奮さへ何時も感じてゐたのである。かういふ氣持の説明は私の文章では成しがたい複雑な氣持である。その道に入らなければそれに通じない迫つた心である。私はどうしても其等の心持を満足させたい希みを永い間持つてゐた。私に郷里の樹木が美しく清爽に映つてくることは云ふまでもない一つは愛郷の念ひも耐えなかつた次第である。

興臻れば争劔を把つて人生の殿しい記述の砦の上に立つべき者が、斯る草本木石の間に徒らに老壽を祝ぐ輩の楽しみを得んとすることは、真向からの人生の記述者の冷

笑に値することも知れぬ。併乍ら單なる草木木石とは云ふものゝ、それらの重鋭交々の朝暮の感じは、時に私をして生れ變つたやうな新しい心で泌々何者かを見詰めさせ或時は月下に丁々たる彼らの脈搏を己れに響くことを感じ、又或者は幾多の天馬の脚なみを數えるやうに靜かな夜天にその石や石の姿を感じる時があるのだ。私自身の感興的な炎の騰り詰めてゐる絶頂時には、彼らも又私の如き感銘に昂奮しながら煙を立てて罩められてもゐる。さういふ温かい私有物の情愛は却つて私をして遊離的な墮落に陥入れることがなく、私をして足らぬものを補ひ、失へるものを與へ又眠つてゐる鮮やかな少年時の鋭い感興を喚び醒してくるのである。寧ろ單なる草木界の現象のみに止まらないで、遠い象徴的なものに手を觸れるものをも感應させるやうである。私の飢え勝な美や愛をもそこで充たすことがあるといへば、人々は一片の囁言として嗤ふかも知れない。私に取つては又道場の如きものであり宛然樂園であると云つてもよいのである。それ故にこそ私は私の庭を徒らに老成の弄び事として閑却されること

を好まないのである。その道に達する者に取つての閑境韻事の類も、その人をよくしても悪くすることはない。――

自分は用なき郷里の庭を想ひ出すごとに、充分に己れを立て直す時間のないことを怨んでゐる。自分は今頃では田舎では生活することの己れに危険であることを考へ、その考へは田舎の庭に自分を縁遠いものにし、次いで愛情にさへ次第に疎み行く氣持を経験してゐる。彼らも又生けるものとしての呼吸を自分に吹きかけては來るが自分は嘆息しながらその庭を永く自分の物として愛することができようかと、そればかり考へるやうになつてゐる。自分は或時その地主に手紙を送つて半地返還の旨を言ひ遣つたが、それは或事情の爲聞き入れられなかつたやうである。何故といへば自分の庭の四方の空地には既に人家が建て込まれてゐるからだつた。それらの家を建てた人々の心理には、自分の庭があるための好ましさは手傳つてゐることは云ふまでもないことである。今暇りに此の庭を取り毀すとしたら周圍の人々は失望はしないとしても

何となく寂しい落着かぬ氣もちになるであらう。庭の毀されることは家を壊すよりも人々に與へる感じは荒々しく悲しいものに違ひないからである。自分はさういふ考へも超越して半地を還さうと望んだが、それすら出來ずにやはり今は嘆息と愛惜の中にゐながら、遠い郷里の庭園を思ふてゐる。

私のごときものには庭などは頭底護られ作られるものではない。第一さういふ考へを持つた自分が間違ふてゐるとさへこのごろ思ふやうになつてゐる。物質の力薄きものは最後にそれが應えて來るやうである。その道の或程度まで行き着いて見れば、石一つさへ容易に手に入らぬ困難がある。雑石に竹を配して我事盡れりとしてゐたころの私は、そのままで終れば幸福だが奥行がわかり、勝れたものを見てはそれ以下の物に従ふことはできない。それ以下のものに尾くくらゐなれば、我々は墮落するより外に道が無いやうである。私の性分として一つに凝りその物を究むる心はもつてゐても、他へ移る心にはなれぬ。若し第一流の道につくことができなければ、自分はもう庭な

を毀して了はねばならぬ。寧ろ殘して置くよりも毀して了つた方が私らしいかも知れない。私はその考へをもつて故園の春の日の下に立つた時にも、やはり取毀つことのできぬ氣持になつてゐた。それは既うこの庭を作つてから三年の月日が流れてゐましたし、樹木は太り枝の尖端は殊さらに鋭い反りを打ち、自分の眼を刺すやうに光つて見えたからである。自分はその尖端を見詰めてゐる内に何か咎められてゐるものを感じ、故園を毀つことの考へを放抛せねばならなかつた。三年の歲月は自分の狭い庭の中でも決して短かいものではなかつた。木と石の調和、土の落着き、下草の形づけられた輪廓、それらの自然であり自由な組立等が殆ど玲瓏に近い、貧しいけれど小さな完成を持つてゐるに驚いたくらゐである。自分は今更らながら三年の歲月を重々しく感じた。その感じだけでも決して自分の最初に考へた取毀つべき悪念を去るに充分であつた。彼らのよき匂ひ、よき装ひや艶や強さや浅いが既に色附られてゐる古色は、ぢかに自分に泌みて映つて來るやうである。自分は矢張り犠牲を拂つても此處だけは育て

ようといふ氣持を決心したのである。年月を経て悪くなるものは藝術以外のものだが此の庭を見て彼は年月とともに宜くなるものであることを感じた。彼が私の或藝術の小さな一現象である以外に、自然からも制裁を受けてあるものであることを併せて知る時、自然がよしと爲すものは益々宜くなるであらうし、悪いものは自然と共に飽迄悪く育てられるであらう。自分の庭がこれらの自然からの制裁と天與の古色との中にあるのは益々自分をして仕事の重厚を感じさせたのである。自分は今までに藝術上の仕事はしてゐながら其等の作品は、むしろ年月とともに自分に飽足りない物だつた。修養の進出と氣魂の埋積とは昔日の自分の文學を不満足なものにして見せ、しかも改訂の暇なきものである。これと反對に築庭の仕事は歲月とともに成長して行くことは、文の道にある嘆きを和めてくれるばかりでなく、又文の道に事缺くものをも訓へられる氣がするからである。文の道にあつて素材と文章の打ち込み方の確かさを見究めることは、なほ築庭にあつてその石材植木の嚴しい撰擇をせねばならぬと同様な肝要さ

である。自分は文の道にその肝要事を忘れてゐたことに氣付いたのも、一つには「歲月」の嚴格な教へに従ふたからである。

石

棄石や飛石を濡らすことが石の壯重さを失ふことを、此頃孰々と感じてゐる。自分は以前には石は濡れねばならぬと書いたが、此頃の心境に感じられることは、石は石の儘の姿で居なければならず、水を打つてはならぬと思ふやうになつたのである。石が濡れることは何か卑しい氣がする。餘處行な氣持と色とを持つからである。寂しさはどういふ石にせよ、濡れないでゐる原色にある。濡れた石は騒々しく寂しさを缺いてゐることは勿論である。

雨などの後、石の面が次第に乾いて行くのに夜の明けて行くやうな爽かさを見る。自分は飛石を去年の夏に六七枚打ち代えて見たが、それは鞍馬だといふのだがその中に一枚しか鞍馬はなく、あとは新鞍馬といふ鐵の錆のやうな肌をしてゐる石である。

これもざらにある雑石ではない。その一枚の鞍馬は品もあり美も備はつてゐることは殆ど驚然たる威厳をもつて群る石を壓してゐる。一體に古い鞍馬などは殆ど稀れなものである。そこらの料亭や鳥渡した庭には使ひきれない石である。東京でも深川の石問屋以外にあるものは殆ど鞍馬の類であらう。

併し自分の郷里には本場近くだけあつて鞍馬は相應に古いのがあり、高價なことは東京の比例ではない。その他植木類も金澤の方が高金のやうである。東京は全國の土地から集るが金澤では樹木までが動かない居處に馴染んでゐるかはり、一寸した小使では手に入らないやうである。相應の樹木はもう町の中で大概知られてゐるから、何處の木や石は何處へ行つたといふふうに見られてゐる。

石に次第に愛着を感じるやうになると、恐らく自分のやうに水を打たないで見るとなるだらう。實際古い庭は水は打たれてゐない。水の打たれてゐる庭は雑庭の類に多い。水を加えずに見られる石でないかぎり、石は石の値をもつてゐないと云つて

よい位である。

築庭の心

自分は最初築庭の心をもつた時は自分の生活の中の過剰を信じ、それを費用に當る心算であつたけれど、此頃ではそれらの庭の費用は年三回の植木屋の手入れの雑用、垣の繕ひや地代の拂ひなどが東京にゐても、五百圓の爲替を組まねばならず若し私が庭へ行くとなるとそれに倍する費用になつてゐる。黙つて打抛つて置いても用途の五百金は庭が攝取してゐることを考へると、昔日の如き小使錢では事足りない譯である私の考への謬りのあることは勿論だが、赤貧の清さを誇る吾等の爲すべきことでないかも知れぬ。併し乍ら今は氣苦勞とまでになつてゐる庭の入費は、漸く私にとつて誠の好きな道であることを教へ、愛する女に惜まぬ金圓の如く次第に私には他を約めても、此の費に投じる喜びを同時に持つやうになつたのである。

曾つて「暮笛庵の賣立」一篇の小説に書いた名園の暮笛庵でさへ、その最後には池に引いてある水道の費用が一年二百圓近く費つてゐたさうであるが、その費用さへも拂へ無いやうになつたさうである。暮笛庵の持主は豪奢一代を越えてゐたが、瀧や池の水の費用も出なかつたことを思ふと、庭を賣立することも無理もないことであらうさういふ自分の庭園の見窄らしさを感じることは、一層愛園の炎の消えがたいことを感じるものに近からう。恐らくそれまでに暮笛庵の主人はどれほどの犠牲を池の水に拂つたか分らない。自分はその池に數羽の雪のやうな鶯鳥が浮き沈み乍ら、春日の長閑さや月明の夜を高啼きしてゐたことを覚えてゐる。しかも一朝嬌奮の夢さめた時は最う庭は毀され樹木は車にて引かれてゐた。自分がかういふ榮華を輕蔑する氣は毛到無いばかりか、榮華の中に私どもに近い氣持の交へられてあることを愉快に感じてゐる。

時には自分は東京の我家の机のそばにゐて、今日のやうに時雨そぼふる晝深い時に

郷里の庭のことを考へると、又同様な時雨の音を聴く思ひがして、和歌などにある無情感と物の哀れを感じるのが常である。或は知らぬ間に自分がかういふ物の哀れさを愛するが爲、郷里に庭を置いてゐるのかも知れぬ。自分が此頃萬葉集などを繙きながら和歌を作りたい氣持の起つてくるのも、これらの物の哀れさが成果となることを望んでゐるのかも知れぬ。人間の心にあるものは時に様々の藝術的表顯を求めてゐることは拒まれない。發句や詩や和歌の分野はありながらも其等の向きの氣持は自ら發句は發句の本道へ志し、又和歌は和歌の姿に即かなければならぬと同様である。自分の和歌を求める氣持は時雨ふる故園を忍ぶ哀情に外ならぬものであらう。その思慕の微かさば或は冬の蝶にもなり時雨の中に雜りながら立つて行くであらうし、和歌の道へも辿るやうになるであらう。曾つて自分はその生活様式の中に和歌の如きものを必要としなかつたものであるが、凡ての藝術の様式では吾々に必要の無いものはなかつた筈である。繪を描き得る才能があればそれに托むところあるは勿論、彫刻や音樂の類

にまで才能を信じたいのは無論のことである。それらの様々な藝術的混合物の大まかな顯れとしての吾々の詩や文はあつても、その珠を砕いて見れば凡ゆる繪のやうな言葉や和歌や詩が美しい破片となることは、疑へない程色々の物の中に吾々は居ることを信じるものである。唯吾々はそれらの様式が吾々の氣質の外のものである時に、それに従くことはできないけれど、それに思ひを潜めることは殆當然のことである。

自分の郷里の庭も今日のやうな時雨の日には時雨を思ひ、雪のふる日は雪を思ひ、又風の荒ぶ日は風を思ふために知らず譏らず自分が作つたものかも知れぬ。最う一つは自分が郷里に庭を持つといふことは、どれ程自分を安らかに仕事に従かしてゐるかも知れぬことである。若し今自分が何物をも所有しないとしてみたら、自分と郷里との隔たりは一層遠くなるであらうし、又自分が殊更に烈しい思慕を郷里にもつことは無くなるであらう。それと同時に郷里への自分の考へは冬の蝶となり飛ぶにしても何處かの途中で落ちてしまふであらう。賣文の仕事を考へながら町を歩く時にも、髻

髻して自分はうしろから押す者のあるのも、自分に微かな勇氣をつけてくれるからである。これらの考へはこの冬の中に今一度故園の雪を見るために、今の自分を旅立たさうとしてゐる。雪の中に埋れる彼らへの自分の挨拶、また彼らが自分にもたらず會釋は又自分の今までに倍する愛慕を故園の上に加えて行くであらう。

金澤のしぐれをおもふ大桶かな

石 一 つ

石を眺め悲しいといふものあらんや。

姿をかしく

されど皺深く蒼みて

雨にぬれるとき悲しいといふものあらんや

わが性さがはつねに

ひらたく美しからぬ庭石をながめ

そをわが家にはこび

日ねもすは眺めあかぬなり。

竹の葉すこしく植え

そのかたへに語ることなき生きものの
石一つ坐りゐるよ。――

われはうつけものの
年わかく世を厭ふといはば人人の嗤はん。
されどいつはりにはあらず
まことは俗流のひとなるがゆえに
佇みて石をばながむ。

こころあらば

誰かわが家に來りて

水なと打ちそそぎたまへ。

語ることなき石あをみて
しだいにものが好む心をば得ん。

冷かや山茶花こぼる庭の石

石に就いて

私は飛石が二枚とか三枚かづつ組んで、番號を打たれてゐるのや、松や楓に新しい紙札の下つてゐるのなど見てあるいた。飛石は地面に埋つたままであつた。私は飛石を見てあるいてゐるうちに苔のあるのを選んで、苔のない石にはあまり手を觸れなかつた。

「苔といふやつは石の紋みたいなものだ。」

私がさういふと、植木屋は大やうに微笑つた。

「いい石は石全體が紋ですよ。」

「それもさうだ。」

私はなるほど面白いことを言ふと思うた。同じみかげ石でも皮つきの飛石があつたが、山から掘り出した時のまま、暗灰色の皮のやうな粗面を保つたままであつて、濼い、

寂寞の情に富んでゐた。人間でいふと五十歳くらゐの落着いた容色だつた。ふしぎに暗灰色のその肌如山嶽の原色が含んでゐてその感じを受ける心は得も言はず好ましかつた。

私は飛石を見て廻る内に昂奮して汗を掻き、喉が乾いて氣もち急いでならなかつた。それに日の光は頭にぢかに射りついてゐるのに、對手は重い壓する氣もちの石ばかりであつた。見ると欲しくなり眼と頭とが疲れてへとへとだつた。

「あなたのやうに急いではいけません。」

と、植木屋が言つた。

「急ぐわけぢやないが。これは欲しいな、これは何といふ石だ、これは面もいいし横の面もよい。」

私は平手で石の肌を撫でて歩き、或ひは飛び越え、躓いてそれらの石の形と色と苔に心を奪られた。或る石は地面の窓や戸のやうに埋り、その戸や窓をひらくものを感

じた。私は力もないくせに自分で石を起して見なければならぬ気がして、そのためか
れは一枚の飛石の横面に手をかけて、顔を真赤に染めた。

「その石をどうなさるんです。」

「ちよつと起して見ようと思つてね。」

「飛んでもないことです。これはあなたがたに起せるものですか。かうすればいいん
ですか。」

植木屋は手をかけると、ばたりと石の横面を起した。どこを使つても良い石であつ
た。石自身は地面を離れて身すぼらしげな風姿をした。

「石といふものは地面から離れると身すぼらしくなるね。」

「埋つてゐた奴が起きると寂しいですよ、しかし埋つてゐたら二倍くらゐ好く見えま
す。」

私は最初に眺めた石のところへ戻ると、後に見た石を思ひ出した。心は色々な形の

上に飛んで彼處ゆき此方ゆきして、石を飛び越え、あるひは躓づき、くたくたになり
また最初に眺めた石のところへ戻つて、感嘆して、

「この石はいいなあ。——」

と言つた。

「茶でも喫んでゆつくり見ようぢやありませんか。植木屋は氣の毒さうに疲れてゐる
私を見て云つた。「石を見るときは呼吸を入れなければいけませんよ。あなたのやうに
立ち歩いては疲れてしまひます。」

私は氣がついて茶亭に腰かけてぼんやりしてゐた、見ただけの石がみな眼の内にお
ぼろげに映じた。

「石を見るのは疲れますね。」

「あなたのやうだと疲れます。」

私は先刻からの昂奮の疲れで再び立てさうもなく、群がる石群を睥睨してゐた。し

かし何といふ氣もちであらう。かういふ物言はぬ相手に昂奮するといふことは？——私は汗を拭いて涼しい風が来るなと思ふと、賣立の家の女中だちが昔あるじに命ぜられたやうに、如露で石面を濡して歩いてゐた。かれらの後方に主人を亡くした妻女がやはり同じく如露の水をしたたらせ、白い腕ただがきを露はに日の光に伸してゐた。私はその光景に仄かなあはれを催した。しかし、あゝいふ心がけはよいのだと私は女だちを眺めた。

「石が生きて来た……」

私は吐ついて先刻からの飛石や棄石のことごとくが水を打たれて身を起さうとしてゐるらしく、生色は沈んだ蒼みのある色どりを日の中に描いた。先刻からの疲れがどうやら静まつて来るやうで、乾いた喉に茶を啜み下して吻くち乎とした。

「あの石はみんな寒蟬亭の石ですよ、寒蟬亭の石はこの城下の八方の庭へ入り組んでゐるんです。」

「では寒蟬亭の石は軸物かきものと同じいわけですね。」

寒蟬亭の凋落はこの城下町の名園のくずれの最初であつた。樹腹庵、向江亭、それらはみな土地會社に買ひ取られ、會社は細かく手数を踏んで飛石は小飛一枚まで賣つて利を占めてゐた。それに何となく百年の庭を守つてゐたひとびとも石の値の高いのに心動いて季節ごとに賣り立てゝ行くのであつた。寒蟬亭の土地は粉微塵に分割され賣り捌かれた。樹腹亭の草一本にも値が踏まれた。城下の町々には植木や庭石を積んだ自動車や荷車が、春と秋の植えかへのよい季節に動いて古い名園の樹や石はちりぢりに別れて住むのであつた。

「寒蟬亭はどういふ作り方なのです。」

「あそこは元、作つたころには……」植木屋は思ひ出して、「最初でできるだけの樹を集めたのです。それを庭のひと隅に留め植ゑをして、その必要な樹をその中から選り出すやうにしたのです、ですから最初に木を集めて置いたので仕事は捗取りました。石

もできるだけのを必要の二倍くらゐ集めて、その中から抜いたのです。」

「それはいい方法だがぜいたくですね。」

「何と言つていいのですか？ あれだけのものはそんな風にしないと作れないのです。植木屋は笑ひながら又、「わたくしは寒蟬亭の鯉を百圓に落札してみな死なせました。」

寒蟬亭の池、みかげ石の亂杭を打つたあの池、——私は一體自分はいま何をしようとするのかと思うた。いつかあの池の上に映る白雲を眺めたことのあつたが、今は賣られて池は埋められ、貸家の胴突き最中であるといふことだつた。

「ところがあなたのまだ喫驚りなざる話があるんです」

「喫驚りする話とは」

私は植木屋の顔を見つめた。

「木藤の庭が賣られるんです。多分、秋口になつてからでせう。」

「へえ、木藤の庭が……」私はあそこはそんなに窮してゐない筈だのにと云つた。

「あれが賣られるのぢや庭らしいものがなくなるんぢやないんですか？」

「土地會社は二十六萬圓に買ひ取つたさうですが、石を一つづつ起した日には倍くらゐになるかもしれませぬね。」

木藤の庭はその石一つでも天下に稀れなものであつた。床の間に置いてもよいやうな石ばかりで、燈籠は稀品であつた。古さ、沈着さ、石と土とのなれ合ひ、——私は一瞥したときに既に亡びゆく名園の都では、この庭の右に出づるものがないと言つた程であつたが、それも時世に伴はれて賣られゆくことを思ふと、私はむか腹が立つてならなかつた。

「金がほしいのかな。」

「さあ、商人ですからどうか判りません。それに、あれだけの庭をもつてゆくか、かりは大したものです。そんなところから思ひ立つたものかも知れませぬね。」

「あの庭だけは残して置きたいものだ、あれがなくなつたら淋しくなる。」
 私は先刻からの昂奮が消えて、冷たくなつた。結局、いいものは碎けてゆく、人間に手ごろなおもちゃだけが残つてゆくのだ、木藤の庭が賣られてしまへば又町の中に荷車や自動車がうごくだらう。そして纏つたものがばらばらに散つて行くのだ。

竹の柱の記

私は植木屋へ手紙を出して、庭を見廻るやうに頼んだ。私は最初の考へである二間くらの家を建て、時々東京から仕事を持つて出掛たり、或は季節のよい春暖秋澄の折を選んで、家族を伴れて一ト月程を暮すことを夢見てゐるのであつたが、私の考へてゐる建築は逆も生優しい金で建てられさうもなかつた。同じ金をかけるのなら庭から造つて行くのも面白いと思ひ、その仕事を始めたのであつた。家とは違ひ、皆生きてゐる物ばかりであつたから、少しも手を離せない不便と不安心とがあつた。石も木も土地に落着いて來た時分に私は心ばかりの些やかな書齋を建て、年々に幾間かづゝ追々建て増して行くつもりであつた。

「庭から造る人なんてあるのですか。」

親戚などは恁ふ言つて笑つたが、普通の人は家を建て、庭を造るので、家に金を

吸ひ取られ、見すぶらしい庭になりやすく又庭を顧る餘裕など残らないやうになるのであるが、庭に金を吸はせてから家を建てるものだ。家などは永年の間に金を吸ふものであるから、一間づゝ建てゝ行けばよいと云ふ私の考へでもあつた。家は寒暖の調和さへ圖ふことができれば、竹の柱や茅の屋根でもいゝ譯で、家などを徒らに建て聳やかして樹木や庭の風致を關はないやうな人間は、それ自體が既に俗人であると言つて宜いのであつた。家を思ふことは土地を念ふこと、土地を念ふことはまた樹木を念ふことであつた。家を念ひ樹木を念はざる人たちは、派手な俗心のみの徒であると言つていゝのであつた。

○

郊外の古い植木屋の庭さきの石や燈籠を覗いて歩いて歩いても氣に入りさうなものは汽車で搬ぶことが困難だつたりして、徒らに思ひを國元に走らせる一方であつた。そのうち秋の手入れを松に加へなければならぬので、手紙で植木屋へ早く仕事を始めるよう

に命じたりした。

友人からは手紙が来て、庭の方を見に行つたが、白い山茶花が踏石の上に冷やかに零れてゐた事、主なくとも花は開くものだといふ俳境そのままの文面で知らせて呉れた上、朱い楓の葉を二枚押し花のやうに封じ込んであつた。この楓は垣根にそうた大きな楓の方です。さう書いて細かい氣のつく老俳友の手紙は、私の哀愁に快く閑かに觸れ囁いて來たのであつた。

「これが今年植ゑた楓の葉ださうだよ。」

私はまだ庭を見に行く暇の無い妻に、その紅葉した二枚の楓を見せて遣つた。

「美しいこと、わたし戴いて置きます。」

妻はそれを本の間に挟んで置いたが、忘れてしまふだらうと思つた。松の吊繩、芭蕉や竹の冬がまへも十一月に入ると直ぐ始めるように言つて遣つた。

○

私は庭へ取り入れた小川の水を取り堰めてくれるように妻の姉へ手紙を書いた。「冬になると溜つた水が凍ると、木の根を痛めますからあの水は堰めて下さい。」と云ふにあつた。

妻の姉から返事が来た。

「けふ川の水を堰めました、小さい鮒の子が三疋も河骨の枯れ株の中で捕れました。可哀いさうな気がして、うしろの川へ皆放してやりました。その他目高がどれだけ居たか判りません。なるべく川へ放して遣るやうにしました。今年入れた川だのに、こんなにおさかなが居るやうになることを考へると、來年は最つといろいろなお魚が入つて来るだらうと思ひます。そろそろ時雨の季節になり雨の多い日が續き出しましたが、そのうち霰がふるやうになりませう。白山一帯の峯々が白々と頂を染めました。」

○

去年の冬、私がまだ國に土地を借り入れない頃、色々の土地を心で物色してゐたのだが、ふと或日、

冬の蝶風の里に飛びにけり

と云ふ一句を案じ詠んだことがあつた。凍てた寒土の町端れや、川べりの邊の土地を思ふごとに、ふしぎに枯木の間を舞ふ一羽の蝶のやうな姿が、いまの自分の空想してゐる心を其のまま羽化し乍ら、日夜の風吹き荒ぶ故郷に走るやうな気がしたから、その一句を作り詠じたのであつた。しかも冬に入つてから東京も乾いた空つ風が吹き荒んで夜中に眼をさます癖のある私に、今年はどうやら本物の蝶の姿が、天龍寺畔の草庵のあたりに立ち舞うてゐるやうであつた。私は書齋で一人寂しく居て、子供の泣聲に煩はされぬやうにして居たものの、深い夜半の寝ざめは冷たく物佗しいまでに、木枯の吹く郷里の庭のあたりに思ひを馳らせるのであつた。凍てる事、凍る事、さういふ總ゆる草木を痛めつくす北風が天龍寺の松の林をゆすり乍ら雪や霰を交せて庭の

中を荒れすさぶことを考へると、愛する女を逆境に置く思ひがしてならなかつた。東には醫王連峯から風す吹雪の日夜、北は日本海から捲いて來る耳も千斷れる冷たい木枯の夜々、小ぢんまりと寒さに縮こまつてゐる可憐な小さい庭の有様が、私には親しい友人のやうな相貌を以つて感じられて來るのであつた。

私は何度も寝返りを打ち戶外の風を聽いてゐると、例の一羽の胡蝶が故郷の方へ向いて、羽根を立てて弱々しく走つてゆくやうな氣がした。

「おれは夜中に眼がさめてそれきり眠れなくて困る。」

私はさういふ寢ざめの折は、必らず國の庭のことを考へていくらか神経が昂奮するのではないかと、心窺かに思ふのであつた。催眠劑を用ゐることも度々だつた。私は庭のことはなるべく床の中で考へないやうにしたものの、ついその心になり睡りを失うて終ふのであつた。平氣で家ばかり建ててゐる人間は神経が太いのだとしか思はれない程、僅かな庭の事でありながら勞れ或ひは思ひ煩ふのだつた。

庭

つくばい

つれづれ草に水は浅いほどよいと書いてある。わたくしは子供のころは大概うしろの川の磧で暮した。河原の中にも流れとは別な清水が湧いてゐて、そこを掘り捌いて小さいながれをわたくしは毎日作つて遊んだものである。ながれは幅二尺くらゐ長さ三間くらゐの、砂利をこまかに敷き込み二た側へ石垣のまねをつくり、それを流れへ引くのであつたが、上手の清水はゆたかに湧きながれて、朝日は浅いながれの小砂利の上を嬉々と戯れて走つてゐるやうであつた。自分はどこかへに小さい橋をつくり石垣には家を建て、草を植ゑ花を配したものであつた。此頃になつてつれづれ草ばかりでなく、水は浅く川はば一ばいにながれて居る方がよいと思つた。水といふものは生きてゐるもので、どういふ庭でも水のないところは息ぐるしい。庭にはすくなくと

も一ところに水がほしい。つくばい(手洗鉢)の水だけでもよいのである。乾いた庭へ這入ると息づまりがしてならぬ。わたくしたちが庭にそこばくの水を眺めることは、お茶を飲むと一しよの氣持である。

わたくしは蹲踞(石手洗ひ)といふものを愛してゐる。形のよい自然石に密柑型の底ひろがりの月がたの穴をうがつた、茶人の愛する手洗石である。庭のすみに置くか中潜りの枯木戸の近くに在るものだが、此のつくばひの位置は難しくも言はれ、事實まつたくその位置次第で庭相が表はれやすい。わたくしは茶人や庭作者の眼光外にあるものだが、しかし此の位置だけは定石であるだけに踏みやぶるわけにはゆかない、つくばひだけは背後の見透しが肝心である。矢竹十四五本ばかりうしろに見せ、前石(つくばひに踞んで手を洗ふ踏石)の右に矮い熊笹を植ゑるのもよい、とくさは手洗ひにつきすぎて陳腐であるから、若しこれを愛する人があるならば此のつくばひから四五尺隔れたところに植ゑて置く方が却つてよからう。しかしつくばひとのつなぎの

ために砥草のわきに棄石がなければならぬ。或る庭で見たのであるが唯の一本の杖ぶりのよい山茶花の下につくばひがあり、水さばきの鉢前の穴の上に山茶花四五瓣こぼれてゐる風情は全くのよい姿をしてゐた。これは偶然に初冬のころだつたので目を惹いたのであらう。

いつそ此のつくばひのうしろに猗々たる藪壘があつても、つくばひが相應に立派なものだつたら百疊の竹をうしろに控へてゐても、しつかりと抑へて据ゑられるであらうと思ふ。主としてつくばひは朝日のかげを早くに映すやうな位置で、決して午後や夕日を受けない方を調法とする。水は朝一度汲みかへ、すれ〜に一杯に入れ、石全體を濡らすことは勿論である。その上、青く苔が訪れてゐなければならぬが、一塵を浮べず清くして置かなければならぬ。口嗽ぎ手を淨めるからである。

兼六公園にある成巽閣の後藤雄次郎作の四方佛は、小流れに沿うて据ゑられ、石佛四體が刻まれてゐる。小流れの兩側に奇石珍木を配してあることは言ふまでもない。

平常閉してある庭中の幽雅は木々草石の上にこもつてゐて、穩かなすれない極寂があつた。上流に突然とした砥草の茂りがあるのも、老巧な植木やの手なみが窺はれてゐた。わたくしは此の手洗ひに佛を刻んである因縁を竊かに考へて見て、清さが故なほ淨からうとする意圖を床しく思うた。茶庭では燈籠は木のうしろにゐても、手洗ひは上手に立たなければならなかつた。つくばひは人の手にふれるものだけに、たとへ隅の方にあつても品格は上手に位するものである。瑞雲院の庭のつくばひは二方の踏石から辿ることになり、一枚の短冊石を踏んで行くのであるがその打ち方も嚴格であつた。兼六園の池のきは手洗ひは大石であるが、三抱へくらゐの椎の大樹の根元にしつかりと置かれ、雄心を遣るに豪邁であつた。わたくしはまだこれほどの大樹の根元に置かれた手洗ひを見たことはない。

つくばひの品格は最も秀れたものでなければならず、形は大きくも小さくもない、程よい見馴染の快いものでなければならぬ。何となく奇岩めいた姿つきで、高峯一端

の清韻を帯び、そのうへ雲霧を掻き起すやうな氣もちのものを算ぶことは實際である聊齋志異の白雲石の口碑のやうに穴あり時に綿のやうな雲を吐かねばならぬ。そして鉢（水を入れるところ）の中は古鏡のやうに澄み古色自ら存る體のものでなければならぬ。蒼い底に水をたゝへた一基のつくばひは、何か庭の中に人あつて鏡を見てゐるやうな心もちを起させるやうである。實際、一掬の清水はよく庭裏の誠をうつすからである。

手洗ひにはわたくしの知つてゐる限りでは、普通のつくばひの外に、しやれた石臼のやうな伽藍形があり、それは圓い石に圓い水鉢がうがたれてゐる。最つとしやれたのに唐船といふのは、自然石の鍬のやうな反りを持つた石の左よりに水鉢があつて、ひかしの唐船のへんぼんたるに似てゐて風致あるものである。司馬温公といふのは三方に峯のある石のまん中が水鉢になり居り、風雅であるが居處をさらふものであるから鳥渡据ゑるところに難しいしろものである。圓星宿は普通の胴圓通しの手洗ひであ

るが、石水壺は先でひろがり底すぼまりの置水鉢で、石材次第で榮えるものだが、わたくしは嫌ひである。却つて石水瓶の三方取手のある枕型の胴すぼまりを面白いと思つてゐる。支那朝鮮によくある大壺取手づきに似てゐて、石であるため陶器以上のおもしろさである。陶器と石とは孰らが面白いかと言へば、味の細かいことは到底陶器には及ばないが、一味通じた底寂しい風韻枯寂の氣がながれ合ひ、ときに陶器に見味ふことのできぬところに、わたくしの心を惹き何かを思ふさま搜らしてくるのである。そのほか方星宿の四角なのもあるが、取り立てて言ふまでもない。富士形、へうたん形に至つては、われ／＼雅人と稱するともがらには要なき俗手洗ひである。つくばひは飽迄自然石を穿つたもので水鉢の磨きも叮嚀に寂然たるものでなければ面白くない。赤日石林氣といふのも亦つくばひの銘でなければならぬ。

寛手洗ひといふのは高みにある手洗鉢に寛の洗をしたゝらすのであるが、これは生きてゐるやうで風致湧くごときものがある。凡兆の「古寺の簀の子も青し冬がまへ」

といふ句があるが、何となくこの句の趣のやうな山住み山家の氣持を表はすもので、春おそい日の永いころに寛の滴る音を書屋で聴くのはこゝろ惜いものである。その滴る水の流れ口を次第に低めにして自然に敷砂利しきじりの間を縫うてゆく趣の深さは、わざと細流をしつらへるより幽寂新鮮味は數倍するであらう。

四方佛といふのは角胴四面に佛をきざんだのであるが、清韻愛すべきものである。わたくしは所謂難波寺形といふ大樹の下に据ゑる手洗ひに、姫蕙の蔓を這はしたことがあつたが、蕙が石面一杯に蒸しつき、葉と葉との間に一掬の水が閑かに澄んでゐるのは、まことに天來の穩かさを保つて、限りなく美しいものである。茶庭では手洗ひの前に湯桶手燭を置き、茶席の會中立前の所作の一つになつてゐるさうである。わたくしは茶の方は詳しくないが、其行きとよいた精神にはいつも敬服してゐる。茶道はまた色道に通ずといふわたくしの哲學は、古今の茶道大義でなければならぬと思つてゐる。清淨の中にもて色道を思ふの情は、林泉に踞して亦垂釣の境に蹲むと一般であ

らう。水光目を浮べ出て轉た佳人を想ふの心を誰も咎めるものはない。こんな色道は枯れ佗びてなほ餘燈に對ふやうで、わたくしは好きである。遠州好みの茶庭のやうに大樹一本、小樹四五本、踏石を分けた中庭括り、八ッ窓茶室といふやうな感じであるそのやうに整ふところに何かの色があつた。さびももとを掘じくり出すと何かの色が出て、褪めてゐて懐しいものである。

石の相

わたくしは世に石ほど憂鬱なものはないと思つてゐる。あゝいふ寂しいものを何故人間は愛で慕ふのであるか。

蕭條と石に日の入る枯野かな

燕村

こがらしや鳥の小石目に見ゆる

同

木枯や小石のこける板ひさし

同

石が寂しい姿と色とを持つてゐるから人間は好きになれるのだが、反對のものであ

つたら誰も石好きにならないであらう。その底を搔きさぐつて見たら石といふものは飽かないものであるからである。さびは深く心は静かである。人間はその成長の途中で石を最初におもちやにするやうであるが、また最後におもちやにするのも石のやうである。俳句が文韻の道の初歩のものであるとしたら、老いてまた最後の文事の友でなければならぬ。わたくしは幼時川原に遊んで遠くに石を投げて見て、何秒かの後に始めて憂然たる石が石を相打つを聞き、世の幽寂の最初に觸手した感じを抱いたものであつた。

芽の吹くころになると踏石や棄石が冬がれの中から身を起し、呼吸をしてくるやうに思へた。すくなくとも何かの鋭どさを現したが、それは木の芽草の芽が浮き出させてくるのかも知れない。浅い芽の色が蒼古たる石を上と下とから形を描き合せるのかも知れぬ。

石は絶えず濡れざるべからずといふのは、春早いころがその鋭どさを餘計に感じる

時であるからであらう。水の溜まる石、溜るほどでもない微かな中くぼみのある石、そして打水でぬれた石は野卑でなま／＼しく、朝の旭のときかぬ間の石の面の落着きの深さは譬へやうもなく奥ゆかしい。或ひは夜來の雨じめりでぬれたのが、空明りを慕うてゐるさまは戀のやうに仄かなものである。それが飛石であるときは踏みかねる心をもつ。朝の間は石の心も静まつてゐると見えるからである。わたくしは或朝、蒼黒い棄石のきはに一本の落の臺を眺め、凝然と驚いて瞳つて眺めた。それは一本のかんざしを持つた何か巨大な生きものゝ、微笑み踞まるのに眼がふれたからであつた。石は庭ぬしの悲しい時は悲しさうな表情をして見せ、機嫌よいときはかれも瀾達で快然としてゐた。一朝わが思ひならざるときその眼を落すのも、石床蒼古の上に停るのであつたが、それよりも先きにかれは綿々の情に耐へざるの風姿があつた。わたくしはさういふ思ひでかれと相抱くことを屢々感じた。相阿彌が山紫水明の間に心を悲しませ、親兄弟よりも木石交契を慕うたと自ら言つたのも解るやうな氣がする。すくな

くとも石面一顰の表情にこゝろづいたときには、その人の愛は行き着いたのであらう或る子供が庭へ出て草の芽のあたまで撫でながらゐたが、その子供のしたことはわたくしの石面をなでると同じいと、しさのあまりである。

ほろ／＼と山吹散るか瀧の音

芭

蕉

待ちかねて隣の梅を折りに行く

同

王庭吉の水仙圖のごときものその水仙のくびの弱々しさ、垂れた一枚の葉の重さ、それで一気に伸びずにしづ／＼と伸びて咲いた水仙、その心はやはり我々と同じい迪りをしてゐるものである。曹雲西の石岸古松をつんざくもの、九龍山人の枯木水邊をゑがいた隠居圖、かれらの持ち合せた心はわたくしどもの網の目のやうな心に、絲を綴り合せてくれ、ほつれぬやうに結んで来てくれるのである。かれらはみな叩けば音をもつてゐた。

石は二ツ接、三ツ組、四ツ組とか言ひ秘傳のやうなものがあるさうであるが、わた

くしは勝手に組めばいゝと思つてゐる。しかし物に釣合といふものがある。その釣合以上の何ものかゝわたくしたちを打つてくれゝばいゝのである。一つ置いた石が物足りなさゝうにしてゐる態が見え、友ほしさうである。或ひは寂寞に耐へない風姿をしてゐる。それを見抜いてやることも我々の心である。何かかれらにも感情があり、一つきりで立てないときにはも一つ石を接ぐのもいゝだらう。そして二つ接いでもなほ母石が寂しがつたら我々はどうしたらいいだらう。五つを接がねばならないが併しそのために調和をやぶつたらどうしたらいいか。わたくしは左ういふ時に無理にも通り母石ひとりを立てさせて置き、さびしがらせて置くのである。

沓拔、飛石の打ち方はくろうとでなければ、これこそ落着かぬものである。利久がある庭へ招かれた時に茶事の後に黙つてかへつたが、あとで石の中に一枚だけ入れかへてあつたことを見抜いたさうであつた。ともあれ、飛石は丁々と疊んで行くいきで庭の呼吸をつがせるやうなものである。これの打ち方で庭ぬしの頭のほどが窺ひ知ら

れるものである。飛石は何處まで打つて行つても止まることを知らず、もう一枚、もう一枚といふふうに先きを急ぐものであるから、止めをよほど決り利かして置かなければならぬ。わたくしは飛石は庭を鏝うてゐるものであることを熟々感じてゐる。

或る時庭の片隅の梅の切株に、靈芝れいしが五本生え、月を経てその菌は笠をひろげた。靈芝といふものは支那あたりに珍重するばかりでなく、床の置物にするくらの稀有の目出度いものである。滅多に生えないものらしい。形は莖も笠も菌であるが質は固く陰干しにするとそのまゝの形を残すものだ。水を打つて見ると朱の色に冴えて見えたその生え方が一本は右に二本目は左に、三本目は笠が大きく少し離れて、四本目と五本目が右と左とに程よいほど離れてゐた。その隔れ方に得も言はれぬ妙味があつた。わたくしはその時漫然と飛石の打ち方を頭腦に思ひ浮べ、こんなふうには打てばいいのだと思うた。自然に生えた靈芝れいしの離れ方にならふことも面白いと思うたのである。何となく岩段沓拔組方といふのに似てゐるのも、偶然ではあるが古くから言ひならされ

てゐることは争へないと思ふたからである。

縁側或は座敷から下りる石はがつしりしたものを用ひたい。そして打ち方は石の行
 莊三四連づつ打つてもいゝし、四二連でもかまはない。たゞ短冊石だけは喰ひちがひ
 に二分の三強の食ひちがひがよい。拍子木ともいふが恰も拍子木二本を併べ食ひちが
 ひ三分の二程度に置いた見取りでゆけばいゝのである。これらの飛石のまはりには苔が
 生えて居れば、何も下草は植ゑなくともよいものである。しかし處々に白い斑の入つ
 た姫熊笹を飛び々々に掠れた黒繪のやうに植ゑるのは、程のよいものである。あるひ
 は苔のまゝでもよい、苔は日苔といひ打水をしなくても蒼々としてゐるのをわたくし
 は一番に好んでゐる。山にある苔である。暑い日には乾いたまゝで蒼く、へいぜいは
 水をやらないで折々の雨を待つか或ひは一週一回ぐらゐの水でよい、がつしりした苔
 である。大苔などはこの苔の方がよい。水をやらない癖にして置けばそのまゝ苔にな
 るのである。苔は肌のこまかいほどよいとしてあるが、山苔日苔の肌の荒いのは一層

の莊重を感じさせるものである。總じて庭は石と苔との値が深ければよい、龍安寺の
 石庭は或る意味で枯淡な達人の心境をそっくり現したものと云つてよい。寂しさにす
 ぐれた人間の心もつき詰めてゆくと、石庭の精神でなければならぬ。わたくしは重い
 曇天の下で、蹲くまり睨み合ひ、穩かにも優しいかれらの姿を一瞥したとき、すぐ或
 る種類の人々の心を覗き見た感じをもつた。

苔は山土の赭いのを敷けば一二年で生えるものであるが、石に苔の生えることは一
 二年では難しく、さういふ淺はかな心を棄てなければならぬ。苔の生えるまで永い
 雨の年月を待つのは雅人のこゝろとしても、苔を植ゑるのは徒はわが黨ではない。飛
 石のへりに日苔のしがみついた形、色の食ひ込みは紙魚しひのある一帖こほんの古本のやうに懐
 しいものである。わたくしは石の上の蝸牛、いなご、せきれいの影を慕ふものである
 が、眞寂しい曇天或は雨日の景をも戀ふものである。拜石などと言つて庭中清淨の境
 に置いて、これを拜む定石はあるさうであるが、わたくしはこんな古いことは廢めて

もよいと思うてゐる。池ぎには垂鉤石といふものがあつたり、硯滴石、硯用石、筆竿石、筆架石などといふ名前があるが疑れば自らさう名づけて見たいであらう。その他鴛鴦石や虎溪石、陰陽石などといふのも、石の形から考へ出したものである。兼六園などはこれらの古い名前の石がところどころに置かれ、古きに則つてゐる。陰陽石などは庭のどこかに昔は隠して入れたものであるさうであるが、詰らないことをしたものであるといふより、何か縁起を取り入れたやうで微笑まれるやうである。

竹の庭

庭は春さきの冬がすつかり終りかけないところがよい。冬のさむさが隅々に残り漂うてゐるに拘らず、春さきの景色もむらさきぐんだ影になり、土はしめりを帯びてゐる。その土や苔のしめり工合に得も言はれぬ行届いた叮嚀さがこめられて、旭のあたり加減の匂はしさは類もない新しさである。何となく植ゑて見たいのぞみを抱く、木

々の間を覗いてあるくと、枝を透いて匂うてくるものを感じる。つまり庭全体の空気が不思議な人情的なるものにつつまれて囁いてくるやうである。穏かに草の芽のあたりに當る旭のいろに天が下のめぐはしさを感ずるのである。季節の故郷である。

厳格と寒威との間に立つた石燈籠がやつと柔和に見え、ひと雨のあとの濡れ方もまた春の色であつた。灯ともし石のきはに芽が生えてゐるのを見ると、わたくしは曾て或る茶人の庭にあつた利久形の古い燈籠を思ひ出した。庭のまん中に据ゑ、松の下に蔓をからませた姿は、あつさりとは好ましかつた。松一本の好みもよかつた。茶室にわたたくしは主人が立つたあとで、釜の鳴るのを聴きながら眺めてゐると、燈籠の落着き方は能く釜の音に調和してゐて、わたくしをして茶室で眺めるものは茶室との結びを持つてゐると思はせた。燈籠は温順の相であつた。洞の細い深いさびをこもらした利久形は、一両あたゝかい心もちがあつた。前後を通じてあの位しづかに燈籠をながめたことがなかつた。頭の奥の方にいまも閑やかに見えるやうな氣がする。

遠州形は笠がふつくりと高盛りになり、荒いつくりで好きである。何となくたゞづみ方に奥行のあるが、宗和形は蕭條として枯木戸のある四方見放しの、庭に向くと思ふた。わたくしは雑木四五本の立つた下へ飛石を打ち、そして又雑木二三本の奥に宗和形を眺めたいと思うてゐる。有樂形、宗易形、珠光形、春日、雪見などあるが、わたくしの好みとしてはせいの高くない肉の相應にある茶庭燈籠が一本あればよい、いや、もう一本ほしいものである。若し心に叶うたのに出會せば、庭中人有人不語の境を讀みたいものである。燈籠は、眼をもつてゐる。庭の四方をぐいぐいと緊めつけ纏めてゐるものである。若し燈籠が詰らない悪作であつたら庭の品を落してしまふものである。わたくしは曾て面を覆ふやうな燈籠を崩して、臺石と中臺とを飛石につかうて見たが、春日であつたゝめに鳥渡よい飛石につかへた。蒼みもあり燈籠らしい由緒をも持つてゐるせい、仲々よかつた。一たいに燈籠の居所は木のかげに頭だけ見えるくらゐがよいものである。燈籠を繁りの前に置くのは、これ見よがしでよくない。

若し繁りの前へ出すなら庭の中からやゝ隅へかけてあどけなくぼつんと置けば、却つて無邪氣に見えるが、さういふ場合よほど古さや形のよい、せいのつまつた燈籠でなければならぬ。燈籠が木と木との隙間から木の葉の蒼みより最つと深い蒼みで、すれゝに姿をかくしてゐるのは清幽限無きものである。いまだき刻みの墓石のやうなものを樹てゝゐるのを見ると、嫌惡の情さへ起らないでぞつとするくらゐである。燈籠一本に庭の大部分の魅力をもたせなければならぬが、と言つても他を疎んじるわけではない。何とも言へない磨きのある調度、行莊の清純、あどけなく閑かにそして眼立たぬやうに作るのが奥の手であらう。質素の庭ひろがりで行くのである。一瞥荒く二瞥やゝ細く三瞥驚嘆する程の細微を盡すべきである。見るほど飽かない謂ひである。一草に心かたむけてあるを見るときに、あるじの愛の深いことを感じる。大した築山や池をほめるのではない。あるじの愛さへ庭に行き亘つて居ればわたくしの望は足りるのである。曾て前田といふ本郷住人の庭園を見たとき銅製の鶴が二羽、からの川の

中に置かれてあるのを見て、わたくしは眼を汚された思ひがした。或ひは唐獅子を置き大砲をさへ飾ることを思ふと、わたくしは情無くなるばかりである。好みは人間をつくるものである。

これは曾てサンデー毎日に書いたことがあるが、或る客があつて庭をつくらうと思ふが、千圓くらゐで一寸したものが作れるだらうかと言つたから、わたくしは發句でも書くやうに、一枚の半紙に無駄書をして手渡したことがあつた。

竹 (矢竹或ひはしの竹)

五百本

飛石 (拍子木二本をふくむ)

五十枚

すて石

三つ

茶庭燈籠 (利久がた)

一本

つくばひ (一つは大きく別のは小さく)

二鉢

山土

十車

そして植木屋手間賃五十人分二百圓は例外である。しの竹、七十圓。飛石(くらま一枚五圓見當。)二百五十圓。すて石、二百圓。茶庭燈籠、三百圓見當。(上物はあるひはむづかしい。)つくばひ、二鉢、百圓。その他山土十車代等千圓である。

これだけで作り上げたものは十年あとには苔がついて、竹も根を張り相應の庭になるであらうが、たゞ、面倒なのは竹は二ヶ月に一度づつ枯葉や蟻、毛蟲のつかぬ様の手入れ、及び刈込、筍仕立、(それは毎年古竹を伐り新竹を立たすこと。)皮剥ぎの手入れか肝要である。飛石の高金は飛石がわるくては庭が疊めないからで、燈籠の三百圓は搜したら適當なのがあるかも知れぬ。また無いかも知れぬ。一本あればいゝのである。

つくばひは手頃なのが一つでいゝのであるが、わたくしの癖として二鉢ほしいのである。役石前庭はもちろん買入れるのだが、これの百圓は見くびりすぎてゐるやうだ一つは竹の奥の一つは縁側から七歩くらゐの居どころにする。山土の十車は苔を生や

すためである。十車では足りないかも知れぬ。以上は別に深い意味のある庭ではなく又茶がかった庭でもない。唯、このやうな庭もあるくらゐに考へて貰へばいゝのである。下草は一切植ゑない。齒朶一枚でもこの庭にはおことわりである。一體、庭といふものは朝夕二回の掃除と打水とが必要のあるものである。

竹の植方では東南西に株を亂して植ゑて置く。這ひ出しの筍を見とゞけた植ゑ方をしなければならぬ。東の方では朝の内のかげを眺め、南西では終日その猗々たるかげを苔の上に撮らねばならぬ。茂りは尖端に揉みついた風情よりも、折々枯葉を取り葉と葉との間をすかし、空の色を伺ひ見るべきである。竹は晝くがごとく伐るべしとはわたくしの信條の一つであるが、手入れ次第で美しく見えるものであるから怠りものには竹はやめた方がいい。棄石は大體において三方へ平凡に置く、北へ面した方へだけ二つ片よせなければならぬ。これは隣家の關係もあり一度地勢を見た上でなければ分らない。

この庭の仕上りは一つには竹の葉づれの音をきくためと、いくらか幽寂閑雅の心を遣うためとである。燈籠といふものはその庭を一目眺めたときに、既うその位置が宿命的に定つてゐるほど動かないところにあるものである。庭の四方の均整を引締めるために、眼光紙背に徹する底のまなこをもたなければならぬ。燈籠の位置で庭が本定りになるのである。

夏の庭

から井戸といふものがある。

實際は水が湧いて居ればなほ結構である。下草は鬼齒朶のわたり一尺長さ三尺くらゐの株を配し、その長い巻葉を井戸の上に覗かせる。一切が下草づくり故、古い作りでゆけばよい。そこに木が要るならば常磐木を一本、何となく下草の間に壺すみれのけはひを感じさせる温かさがほしいものであるが、季節は過ぎて夏に入つたら、そこは清涼の巻葉をほぐさなければならぬ。鬼齒朶といふものは夏の朝日の中でその青い

孔雀の巻葉をほぐすものである。わたくしはその齒朶の壯麗をこの井戸づくりの傍で眺めたいと思うてゐる。秋は庭の蟲がしぜんこの井戸ぎはへあつまるのも、その作り古さ、濕りや置露の永持ちするためであらう風に考へたいのである。

そのから井戸から離れたところにわたくしの好みから言へば、何かの雜木のかなりな大樹を四五本植ゑ、その中に梅をまじへ、下草にはいろ／＼のものを生やしたい。その下かげへ飛石を打ちその小さい森を明るい方へぬけられるやうにして、肩に木の枝がすれ／＼に觸れるやうにしたいものである。木の枝のからだに觸れるのは戀のやうに優しいものである。此の茂りの中は、夏は涼しく秋は枯葉の音のするよう落葉樹をも雜へて植ゑるようにする。庭のあるじは此處をぬけくゞつては行く。此處をぬけることは庭ぬしには何かやさしい心をもつた時であるとしたらなほいゝのである。

朝霞飼屋が下に啼く蝦かにツ

賞しほびつゝありと告げん兒もがも

川村王

山高ちかさ昔のしら露しげみ愁うれ憐るゝ

こゝろを深み吾が戀やまず

人 麿

此の茂みの中に蛙を放ち、かたつぶりの姿がから井戸の雨の日に這ひ出るようになら、一層生きた寂びを感じるであらう。石を想ふことは蝸牛を念ふことに近い。蝸牛が自分の半分くらゐの甲羅の子をつれて、雨でぬれた石の上を這ひ遊ぶ姿はいとしさに耐へがたいものである。夏の日にこの姿を想ふの情は庭を愛する人に忘れてならぬことでめる。

わたくしは築山といふものを好かない。土地が自然に高まつてゆく心もちがあれば築山のやうなものは要らないと思うてゐる。池も何となく好いてゐない。若し流れを取り入れることが出来たら、池はいゝものである。池をしつらへるとすると築山がなければならぬ。そして庭の勢をせり上り加減に高みにして行くより外に、わたくしとしての好みはない。池に涓滴があれば生きるが市井の間には水道の水を引くくらゐ

なれば、池など止めた方がいゝと思うてゐる。あさましさの露れることは庭の清さを毀つからである。どういふ庭でも築山はみな失敗である。京都諸庭の築山でも兼六園のそれでも皆取つてつけたやうな無愛想ものばかりである。むしろ自然の山を取り入れたものは、さすがに落着いてゐるが、さうでなければ築山のあさましさには身ぶるひするくらゐである。池にしても蒼さも古さも馴染もない荒ら水に、鯉などを生かしてあるのを見ると、腹は立たぬが笑ひたくなるやうである。池は水の色の蒼みと何とも言へぬ濁りが尊い。曇天の如くして然らざるものである。

わたくしの考へでは夏は笥手洗ひをこぼれる清水の音ぐらゐが恰度いゝと思うてゐる。大庭なればそれだけでは済まぬが、わたくしたちの親しむ庭は笥の音が庭の一隅できこえる程度でいゝ。秋になれば最つとその音が澄んで庭中臻らざるなきであらう幽寂を主としなければならぬ。閑やかさと、目立たぬ内氣のつくりでなければならぬとしたら、笥よりも笥の音がよい。

噴井があれば細流をしつらへてもよい。わたくしがむかし川原で遊びくらししたやうな細流が、庭の間に隠れて流れ、藪の間に消え失せるとしたら一層心意氣が高まるやうである。庭はできるだけかなめを匿し、一瞥のあとに物足らぬくらゐがよいと思つてゐる。座敷から見た表のみの作りは浅はかである。庭は四方見通し作りで何處から眺めても裏のない作りこそ本統である。裏を心棒にする作り、裏へ裏へと疊んでゆくべきである。垣越の隙間もない姿を見せることも、わたくしたちの心得るべきことであらう。庭のうしろに廻つて見て始めて庭作りの用意の見えるのは、床しい限りのものである。

はなもりは心許こころゆるしついでわが吾妹

上枝の梅をこゝに手折らむ

元 義

人こそはかはり行けども松の屋の

もと松枝に匂ふ月かけ

同

わたくしは曾て松と石とで、蒼緑の庭を思ふたことがあつた。唯、松と松とを累ね或る松の峯枝は空を戀ひ、或る松は水を思ふて垂れ、また一本のそれは縁近く枝を伸して枝を偲ふといふ様を描いて、かれらの根もとはそれ／＼の石がしづかに身を横たへてゐる態を思ふと、颯々の風は軒端を掠めて去るのであつたが、何かいん／＼たる趣があつて忘れられなかつた。西行や芭蕉の或る息づかひを遠くに睨んでゐるやうで愉快であつた。春は春ぜみが啼き秋過ぎて松かさ落ちること、宵ごとにしげくなり、朝思暮想の愁ひに耐へぬといふさまは、わたくしの淺ましい空想ばかりではなく誰もこの思ひに身を沈めるときはい／＼なあと思ふであらう。松のみどりは冷たく幹は温かいものである。石は枝を透いた日を帯びてしばらくは秋をとどめてゐる。こんな境は古い日本の戀をおもふによく、またそれらの歌俳諧をよむのによい。或ひは雨の日とその雨の音松の葉の上に消え、石の肌はまだ濡れぬありさま、——これらを思ふとわたくしは生き甲斐のあることをつく／＼感じる。

わたくしは實際よく夢を見るが、その空想と同じやうに庭のことばかり夢見てゐた。或時は磊々たる川原の中に石の築いた堤を、その中に藁と丸太との家をつくり、暴風を防ぐために松や竹を植ゑ、石の堤は不意の出水のために二間くらゐの高さと嚴丈さとして押し廻して、自分はその石の堤の上に腰をおろして坐つてゐた。さういふ夢の中の自分はもはや此世の仕事の何も彼も終つた身軽さで、毎日茫然として月日を送つてゐた。そんな夢は幼時川原ばかりで遊んだことが原因してゐるらしく、現に石の堤の中にも一條の流れを引いて、そこに自分の食ふべき魚を池と流れに圍うてあつたのは、夢の中にも用意おかいことをしてゐたものと思つた。しかし能く考へてみると最早石の堤の上に腰をおろした自分には何人も訪ねるものもなく、またわたくしを指さして囁くくらゐの極く稀な學生の二三人くらゐがあるばかりで、都門の方、密雲漠々として測り知られず、むなしく日を仰いでゐるばかりであつた。夢さめて自分は自分らしいことを夢見たものだと思つたのである。そして自分はそんな藁小屋の中に

本棚を作ることさへ考へてゐるから可笑しい。茫々たる川原を選んだことは初めそこだけが税も要らず地面も安く手に入つたためであらう、夢ではあるがそれだけは覺えてゐる。王維の詩に、相送臨高臺、川原杳何極、日暮飛鳥還、行人去不息。といふのも思ひ出される……。或時は夢の中で大きい石をひとりで動かすと見て目がさめたりした。芭蕉は夢に杜國を見て號泣したと日記に書いてゐる。

垣
根

廢園のみやこといふものがあれば、錯落たるわたくしの故郷のことであらう。秋口は一軒の庭のものが皆散りこぼれた。落葉のみやこである京よりも悲しい。

行春や白き花見ゆ垣のひま、垣は庭のそと圍ひの表情を定めるものである。袖垣は庭の部分の眉のやうなものであると言つてよい。わたくしは鶯垣といふのを愛してゐる。黒もじの小枝をそろへて作つたもので、垣のあたりに小枝のさきが出てゐて鳥渡いゝものである。國では竹の小枝をそろへて鶯垣仕立てにしてゐる。

砥草腰とか言ひ、砥草の節のやうな作りがあるが、きれい過ぎて俗なものである。垣は自然の草木の名前を借りてつけてゐるのが多い。梅擬袖垣、柴折垣、とくさ垣、うぐいす垣などである。覗き牆などは月がたの穴を三面にくりぬいて、そこから梅の幹をのぞかせたりするのである。秋ふかく唯の竹の四ツ目垣に何かの蔓の枯れたのを憚ぶのもよいものである。枯木戸といふは能くあるものだが、名前もよく秋らしい好みである。最明寺柴折戸といふのは上の方へ上げる仕かけの戸で、荒く菱形に竹を編んだ見透しの戸である。一寸いゝものである。

そと圍ひの垣の上へ樹の覗いてゐるのはよいものである。雑木では杏、ざくろなども廢園のみやこに折々覗かれる。ざくろのかつと口を開けてゐるのは鋭い感じである。叩くと中の實のつぶがこぼれ、土の上に珊瑚と光つてゐる。わたくしはこんな野趣にも心が惹かれる。杏は花どきの、それも蕾の時分、雨の降り泌みた色の美しさは忘れられない。色をひねり出した新しさをもつて光つてみえる。柿の葉のみぢした色が

屋根の上を埋める故郷を、行くごとにわたくしは感心して眺めるのである。あれらの葉を搗いてみたら色が採れさうに思へてならぬ。それから棗の木、さびしい實のいろをココア色に染めてゆくのが秋の日のしをらしさを露き出してゐる。その青い間は子供らしく、色がついてから妙に仙人めいて来る。

枳殻の垣根は秋に黄ろく圓い實をつどり、温かい色を濃い枝と枝との間に浮べるがそれを見過して路ゆく心はえも言はれず快よく秋らしいものである。何か徳を得た思ひである。九年母、青蜜柑、まるめろ、とりわけ青蜜柑の木の下へよりそうて、その實の姿を眺めると、青さが歌俳諧の悲しさを色どつてゐるやうに思はれてならない。考へ深さうな濃緑が次第に黄ろくなつてゆくのも、朝焼けのやうに美しく思はれる。下草ではわたくしは鶏頭を好いてゐる。鶏頭の二三本が竹の中や笹の奥に立つてゐるのはいいものである。寂しい石の裏に一二本生えてゐるのも石の肅條としてゐるのにじみな鶏冠の赤さが冴えて、一そらの秋深き感じを起させる。

鶏頭や雁の來るとき尙赤し

芭

蕉

いつか或る石屋——と言つても庭石をひさぐ家であつたが、其處の石と石との間に手ぎはよく鶏頭を生やして、主人はわたくしを案内しながらあの石はいくら此の石はいくらと値を言つたが、わたくしは戯談に鶏頭の値も入つてゐるのですかと尋ねようかと思つたくらゐ、美しく榮えてゐた。秋おそく雨が冷たく注ぐやうになると、鶏頭は黒ずんで穂を垂れがちになる……わたくしはその時分の鶏頭がなかんづく好きである。さはると種粒が雨のやうに降る……。そのかはり鶏頭は二本あるひは三本以上植ゑることはならない。色のある花物を嫌ひなわたくしは四季を通じて、恐らく花といへば此の鶏頭くらゐが庭の花であらう。庭に花の色があるといふことは、庭の極寂を破ることが夥しいからである。それ故わたくしは鶏頭以外の花は植ゑないことにしてゐる。

冬の庭

冬になると庭を眺める時がすくない。霜で荒れた土の上に箒をあてると言ふわけにゆかないから、秋晩くに手入れを充分にして置かなければならない。この手入れさへ怠らなかつたら冬ぢうそのまゝにして置いてもよい。木の葉なども綺麗に掃き取つておけば、亂れるといふことはない。冬の庭の味ひの深いのは何と言つても霜で荒れた土がむくみ出し、それが下ほど凍えて、上の方が灰のやうに乾いてゐる工合である。苔は苔のまゝむくみ上つてゐるところに、何とも言へぬ深い寂しみが藏しまはれてゐて、踏んで見るとざつくりと土が沈む。乾いた灰ばんだ何處か蒼みのある土が耐らなく寂しい。掘り出しもの、朝鮮の焼きもの、やうな色と粉とから成り立つてゐるからである。

冬は庭木の根元を見ると、静かな氣もちを感じさせる。灰ばんだ土へしつかりと埋め込まれて森乎しんとしながら、死んでゐるやうな穩かさをもつてゐるからである。庭を愛するひとびとよ、枝や葉を見ないで根元が土から三四寸離れたところを見たまへ。

さういふ庭木の見かたもあることを心づいたら、わたくしの言ふことはないのである。

冬は四季を通じての庭のはらわたを見せるときである。庭の持主の心づかひが此の季節にすつかり表はれ、春夏秋の手入れや心配りの程が解るやうである。春夏秋の怠りもまた冬になると露あはれるのである。池水がよごれて居れば氷こほりが美しく見えない。木の掃除が行きとゞいてゐなければ枯葉を亂すおそれがある。

何と言つても冬の庭は嚴格と品とをもたなければならぬ。どれだけ嚴格であつてもよい、むしろ嚴格すぎて優しいところができれば、冬の庭としての全幅を含んでゐるやうである。冬の庭は障子硝子から一と目眺めたきり、それ以上眺めることがすくないものであるから、その瞬間に何かゞ視覺を打たなければならぬ。冬は寒いから庭のありさまも温かくしなければならぬといふのは俗説である。どこまでも深く鋭い方がよい。徒な松の吊繩、藁わらのかけ法師、植木の巻藁などはよくよく考へてから、その

位置を作らなければならぬ。烏瓜の實の朱い色が凍み亘りその色が黝ずんでゆく、しまひに吊柿のやうな色になり干乾びて種が鳴るやうになる。そこで初めて烏瓜の美しさが感じられるやうに、冬の庭も四季の終りに豁然として美事な眺めに就かなければならぬのである。

雪は冬の庭に永く眠つてゐるほど寂寞である。雪がきたらそのまゝによごさずに置くのである。雪に觸つたところが一と處でもあれば、その睡り深い姿を掻き起す。寂寞が亂れてはならない。消える時もひとりで斑に美しく消えるにまかせるやうにする。手洗ひや、つくばひに張る氷も雪とともに厳格以上の厳格さをもつてゐる。冬の庭の要を鏡のやうに磨き立てるものでなければならぬ。

冬の庭木としては別に特別なものはないが、梅擬の實の朱いのが冬深く風荒んでくるころに、ぼろ／＼零れるのはいゝものである。南天の騒々しさにくらべると仲々澄んだ感じである。これは零れ落ちるときが最もよい。下草でも莖の強いもので實や穂

になつたものは、そのまゝ冬も刈らずに置くと却つて風雅なものである。石路の花も枯れたまゝ置くと佗びた姿で春まで残つてゐる、砥草などは北風にさらされる莖の色が茜色に焼け、さかんな水氣を吸ひ上げ尖端を蕭條と枯らしてゐるなど冬の色である。砥草はまゝとめて植ゑるよりも斑に七八本づつ亂して置く方がいゝことを冬に入つてから知つた。

杓杷の實の斑に残つたのは、その朱い實を見つめてゐるだけでも、悲しくなる或る種類の愛情をもつてゐるものである。八ツ手の花は品はないが朝霜の中では清冽な一脈の氣焰を上げてゐる。黝ずんでくるころは仲々美しい。――

山茶花は白いほど品がよく淡紅はよくない。蕾のころか零れ散るころかゞわたくしの心に叶うてゐる。枇杷や茶の花は枯淡以上のもので、枇杷になると花ではなく、古い陶畫の一部を剝ぎ取つたやうに思へる。茶の花がいくらか枇杷よりか優しくあてやかだ。珊たる蕾の姿は霞や餅米のやうに小粒で美しい。どこか庭のすみの方に二三株、

目立たぬほどに植ゑて置く心がけを侑めるくらゐで、じみな花である。しかしその實に至つては天來の寂しみをもつて、割れて口を開けその根元に種をこぼす、母のころをもつてゐる懐しいものである。わたくしはよく椿の實を枝にたづねたものであるが、茶の花は根元の土の上を捜ねる方が、早く種が見つかりさうである。全く茶の實は枝にはなく土の上にこぼれてゐるからである。

わたくしはこのごろ松竹梅しょうちくばいといふ三點樹を昔の人がさう言ひならしてゐる言葉に感心してゐる。松竹梅といふと古い言草であるが、松といひ竹と言ひ又梅といふは樹の中の三兄妹であつて、三樹交契のいみじさ美しさは啣々としてわたくしの心に何かを囁いてくるのだ。木の世界の王さまでなければならぬ。實際この三樹交契を以つて庭を作るとしたら最早何ものも要らない。昔から此の木々を以つてめでたいもの、標本とした。その故深い意味が意味ばかりでなく、心までさう感じさせて來たのは恥しなからわたくしに取つては最近のことである。あまりに目に觸れすぎたため此の三樹交契

が日本人の性分をこまかに織り出してゐたことさへ忘れてゐた程であつた。芭蕉の俳風も眼を閉ぢて思へばこれらの三樹交契の幽韻の内にもあるやうである。もつと進んで考へると此の交契の奥深くに吾らの祖先が一幅を壓して坐つてゐたことも思はれるのである。

松はその風籟の音に秀でてゐるは言ふまでもないが、一群の清韶は遙に天に向つて何ものかを奏かなでてゐるやうである。葉も枝もよいがその音を取らねばならぬ。西行、芭蕉の道であらう。竹はすすぐな心を表はしてゐるやうで陳腐であるが、左う考へる方が無理がないやうである。かれは寂しいが喜んでゐるやうな木である。絶えず愉快な表情の中に、流れるやうな寂しさをもつてゐる。そして雨とか雪とかになほ一層その奥の手をみがき出してゐるやうである。

梅に至つては匂ひであらう。

庭の隅の方から作つてゆく。一つの隅を作り終へたら、又次ぎの隅の一部から疊ん

でゆくのである。そして三方或ひは四方から作りあげてゆくうちに、庭の中心がひとりで出来あがるのだ。庭のまん中から作つて行つたら滅多にかたがつくことがない魚を料理るにまん中から庖刀を入れることは、料理ることを知らない人のすることである。腹や頭から庖刀を入れねばならぬ。それと同じやうに隅から作りあげ、ひとりで中心を残して行つたら、そこで中心をぎゆつと縮めるやうな心で、最後に帳をするのであるが、この一點の仕上げの行き方で、庭を活すとも殺すともできるのである。

木藤の庭

金澤滞在中むかし木屋藤右衛門の住んでゐた屋敷あとの、いまは或る富豪のゐる庭を見せてもらつた。珍しいと思つたのは前庭にむかしの街道ものらしい松が二本つツ立つてゐたことで、それが調和を破つて見えた。木屋藤右衛門といふのは北加賀の潟べりに住んでゐた人で、この家を燕臺の別荘にしてゐたものらしい、東の廊から日夜美妓を招んで酒林に坐して殆ど一代にして飲みつぶした人である。

池の配置なども極めてありふれたものであつたが、踏石は美事だつた。ことに日苔といふ乾いた地面にも青々としてゐる苔の冴えかたは、百年の庭をすつかりつゝんで沈みかけた踏石の上へのしかゝつてゐるくらゐいの、夥しい根強さであつた。奥庭の拍子木と短冊がたの踏石などは、まるで苔を枕にして寝てゐるやうであつた。松は結ひ立の鬚のやうに櫛目正しく手入れしてあつたが、空池かみいけのながれや築山や石燈籠など

に掩ふやうな風情はなかつた。

奥庭から前庭へ通じる雨びらきの柴折戸に向つて、歸途についたわたしは突然に驚きを感じて歩みをとめた。それは踏石につゞいた柴折戸の向ふにも續いた踏石があつて、苔をかむりながらなほ古びた蒼々しきで、丁々と打たれてゐるからであつた。むしろ疊まれた踏石の嚴格さが城のやうに横たはつて見えた。

「まるで城が睡てゐるやうですね。」

わたしは未翁老にさうさうやいた。

「なるほどいゝところを見つきましたね。」

わたしたちは柴折戸をくゞり向ふの踏石の上に立つた。いま歩いてきた數十枚の踏石の姿を見渡したとき、やはり蒼古たる城のごときものを感じた。しかもすぐ目の前の踏み分けの石の上に、赤とんぼ一つ堆朱つちしゆを垂れ、しづかに秋の日の中に羽根をやすませてゐた。

そこから前庭に出ると築地の塀があり、塀のうしろは隣家の藪であつた。藪を負うた築地の塀は落着いた感じでしばらく見とれてゐた。ふと塀のきには供待ち風の小屋があるので、その戸をあけて見ると意外にも厠であつた。みんなが笑ふと先刻から尾いて案内役をしてゐた少女が、やつとをかしさうに笑つた。むづかしい顔をして黙つてゐた少女の笑ひ顔が長閑に見えた。

「これは何の實でせうか。」

「いちぢの實ですよ、食へるさうですが……」

未翁老は少女の方を振り返り、一位いちゐの實を指して「これはたべられますね。」と言つた。

少女は知らないと言つてかぶりを振つて見せた。柵のやうな細かい葉の中に鋭い赤い實が半ば隠れながら覗いてゐて美しかった。

「なか／＼いゝ庭ですね。」

わたしは或る踏石のかたはらに山百合の二三本が、半ば枯れながら立つてゐるのを風雅に眺めた。庭の中心ともいふべきところに、少しも見るところはないが、組み立てられた剰餘あまりの風致に棄てがたいものがあつた。どういふ庭でも左うであるが、この庭には柴折戸と築地の扉とに甚だ風情があつた。

「此庭はちやうど河岸の上にあたるんですよ。」

しかしその割合には展望的でないことが嬉しかつた。展望をほこる庭は俗界のもので、庭にはすこしの見晴しがなくともいふのである。私はこの庭にそれがないといふより、木が老いてその眺めをさまたげてゐるのを知つた。展望を主とした庭といふもの、また、さういふ見晴しのきく庭は、どんなに隙間なく作られてゐても遠景がそれを抜いて行つてしまふものである。

私は木藤の庭を出てとある道具屋で一つの硯を見つけた。歙洲硯で裏には銀砂が渦のやうに吹いてゐた。未翁老はあゝいゝ硯だと言つた。

六窓庵

博物館の中にある六窓庵の茶室を見に行つたのは、まだ霜枯れの嚴しい冬の半ば頃であつた。自分は主として四方佛の手洗ひを見たかつたのであるが、冬構への藁に包まれた手洗ひは外からうかゞふべくもなかつた。しかし石のはだの蒼みだけは藁の間から一層澄み、四面に彫られた佛の顔の一つさへ、藁の間から温顔自ら差しのぞかれて久しぶりの京洛地方を旅して歩いてゐるやうな思ひがした。

自分はこの小さい庭の中の木々が、みな根を露して植ゑてあるのを感心して見た。立樹が空を覆ふやうな作りであるのもよい。それよりも上野の雑踏を潜りぬけて來た自分の袴の埃が感じられるくらゐの、珍しい物靜かさを愛したのである。電車、自動車の響を遠退いたこの六窓庵のほの暗い窓口に、自分は沈んだ穩かさ靜かさを眺め、折から枝葉を渡る菊戴が何か木の實をさぐつてゐるのを見上げたりした。

自分は歸途の電車を浅草へ向け、小閑のまゝ、あちこち歩いて見て、茶室の壁へ塗り込んだ芦の葉が一枚だけ、氣もちよく折れて、寂寞として埃にまみれてゐたのを思ひ起した。芦の葉を壁へ塗り込むことは風雅を極めたものらしく、ちよつと珍しいものであつた。自分は騒々しい浅草の中にあゝいふ茶室が飛石や木に圍まれて残つてゐるのを興深く覚え、それらの全てを通じた感じは、一人の老翁が靜かに憩うてゐるやうな氣がしてならなかつた。

夏になつて自分はまた四方佛手洗ひを思ひ出して、上野を指して出掛けて見たが、手洗ひにも夏が来てゐて美しい水を湛へ、青竹二枚割の筧がその上に注いでゐた。伊豫笹の芽立の新葉のそよぎさへ、一夏の清閑を遣るに充分であつた。自分は薄彫の佛の面を眺め、その苔の程よい色を眺め、自ら夏帽の下に汗の冷えるのを覺えた。手洗ひの好きな自分はこれを稱して庭の鏡だと云うてゐたが、これは古鏡にたぐふべきものであらう。

何日か駒込の通りで、この四方佛の型と尺とをまねた手洗ひを見たことがあつたがその主人は博物館の四方佛の型を取つたことを自慢にしてゐたが、今、兩者をくらべて見ると、似ても似つかぬ模倣であつた。模倣といふものがどれだけ莫大な實力を要するものであるかといふことを、自分はしみじみと思ふのであつた。模倣は天才の仕事でなければならぬ。自分はそんなことを考へながら庵庭を辭するとき、青苔の上に靜かな蟻が行列を縫うてゐて、夏のいとなみ最中であつたが、蟻もかうして見ると幽遠の世界のものゝやうな思ひがした。かれは千里を練るやうに夏の大路を行くのである。

廢園

二三年前に住んだことのある田端の家へ移ることになり、久しぶりで草木のある庭に佇んだとき、無数に挨拶を交はすけはひを花を着けた沈丁や、しの竹、寒竹、とくさ等の群生したあたりに感じた。手をふれて見ると寒竹の上にも埃が花粉のやうに立つた。みんな疲れあえいでゐるやうなところが見えた。針のやうな細かい枝を交したどうだんの根もとに、二本の蔦の葉があざやかな青さですつきりと霜で荒れた土の上に立つてゐた。よくも忘れずに葉を擦げたものだと思つた。

震災後に今朝は返り花も摘み捨てつ、といふ句を書いて歸國してからも、この庭のことがよく朝の目ざめに思ひ出されたりして、却つて自分が住んでゐるよりも最つと壮烈な抒情を感じた。まる三年ばかり住んでゐるうちに自分はほんの少しづつ植えては、隅の方から作つて行つた。借家の庭を作るといふ氣持でなしに、居る間は自分の

ものだといふ心もちであつた。いま舊い主人のわたしが立ちかへつて佇んでゐるが、微風もない穏かな春浅い日の中に、自分の耳もとにひそ／＼した話ごゑが漏れてきこえる。……眼を土の上に落すと齒のやうに細かい擬寶珠の芽先さが隙間もなく古葉をつんざいて出揃つてゐた。

私は何故か廢園の春といふ感じをもつた。あるじを失つた樹や草がやはり花を着け暖かい日の中にあるが、どこか蕭條と見窄しげな姿をしてゐる。私が一番大切にしてゐたものは數百本と數へきれない木賊の繁りであつた。こればかりはすゝたる青い莖の列を揃へて、得も云はれず美しい姿をしてゐたのは何より嬉しかつた。千葉縣のさうかといふ驛端れの山里から、トランクに二杯も詰めこんで引いた木賊であつた甥と女中とが夜汽車で歸つて來てから、植木屋が夜業をするやうに灯の下で根分けをした。壘表を敷いて鉄をもつて坐り込んだその晩の灯の色まで忘れられなかつた。今水を打つて見ると、水を含んで初めて黒ずんで浮く木賊の節々が、青い莖の間にくつ

きりと紫ぐんだ黒みを帯びて見えて来た。

この廢園へ越さない前に、ふと庭のない人といふ題の詩を書かうと考へてゐた。それは庭のない家に住んでゐる庭好きな男が、毎日白い日の曇つてゆく往來を散歩しては、人家の垣根にそうて庭木や石の姿を覗き見て、悲しげに歩いてゐる心持を書くつもりだつた。そして庭のない男の眺めるものは徒らに曇りやすく白んでゆく往來と、人家の垣根の犬潜りくらゐであつた。埃は彼の裾や履物を白くしてゐる。だが、それにも拘らずかれは朝となく夕方となくぶらついてゐる。……といふ詩であつた。が、いまはその詩を書かずともいゝと思へた。全くわたしは舊い庭にめぐり會つて詩一篇を失うたわけである。

小栗風葉の庭

自分は小栗風葉さんを知らない。——しかし小説を注意して讀み出した中に風葉の名前が頭に残つてゐる。作品も「耽溺」を讀んだくらゐで、何處か田舎にゐられた程度で路傍の人の感じであつた。同じ文壇に住んでゐながらも路傍の人といふ感じを有つたり持たれたりすることは、仕方のないことであるが矢張り物足りないことである。

武川重太郎君から聞いた話であるが、風葉さんは植木屋を連れて豊橋の町端れの松林へ出かけ、姿のよい松を自ら擇つて見て買はれたさうで、その時は何時も奥さんも御一緒であつたさうである。それだけの話を聞いて自分は生前の風葉さんに會つたら話も合ひ、愉快な半日を送ることができたらうにと思つた。そして自分は「風葉の庭」を頭にゑがいて懐しく感じ、折があつたら遅れ走せではあるが香花をかゝげ傍ら、い

まはあるじ亡き庭を一瞥したいことを武川君に話したりした。

秋聲さんからも風葉の庭はいよといふことは聞いてゐたが、植木屋を俱して松を見にゆくことは、近時稀れなる美談である。藪の中に小徑があつたりして仲々よい庭ださうであるが、恐らく自分の想像する風葉さんは、庭を愛し庭とその日その日を送つてゐた人であらうと思つてゐる。遠く文壇のほこりを避けて、静かではあるがさびしい暮しを木石に託してゐたやうな有さまが、悲壯の心を取交せて懐しい限りである。

日本の文壇に衣食を得て田舎で暮すことは、次第に文壇に遠ざかることで、何か危険を感じることである。妻子を伴つてゐて田舎の生活を暮らしてゐても、文壇といふところを隔れてゐては生活の憂慮も殖えてくるわけで、さういふ意味で閑雅の生活に親しめない人も多いであらう。僕のごときも矢張りその心配がある、風葉さんは物質の方でいくらか樂であつたせゐでもあらうが、いま僕のごときはすぐにそんな暮しはでき

さうもない。

文學の中で特に非常に新しいものはすぐ亡びてしまふが、新しくて古風なものは何時でも残つてゆくやうな氣がする。新しいものをねらうといふことは既に作者の頭ができてゐない證據で、芭蕉はあの時代で新しかつたがねらうたところは古かつた。何ともいへないその古風さは危氣なく今に至るまで吾々を敬服させてゐる。作者といふものは一人立ちで見えるもので、その作者だけの急所や特徴を世間もなほ見てやるべきものである。作者は時代の心と併行しなくとも何か時代抜けのした馬鹿々々しさがあつても、その心は雄なりである。時代の心に添ふことに汗水を流すことは、作者のとるべき道ではない。――

風葉さんは時代に行き過ぎられた人であらうが、晩年のその心もちは近時風雅の心を失してゐる吾々に取つて、氣もちのよい美談である。録して敬意を表する次第である。

深夜の庭

夜中に目をさますことが癖になり、いつでも二時ごろには枕の冷めたいのに気がつく、夜半夢ならざるの境ではないが、何となくぼつかりと目をさます。そのたびに庭に涓滴があればいゝ、こんなときに水音をきくのもよからうと考へる。いつか山縣公の椿山莊だつたかの記事が出てゐて、山縣亡しくなつた時にもなほ涓滴依稀たることを新聞は報じてゐたが、何となくさういふ話を思ひ出す。山縣は庭作りがうまくて絶えずパイプを唾へ庭へ出てゐて、しまひに齒をわくるくしたさうであつた。そして庭作りは一人前の植木屋よりも上達してゐたさうである。

庭といふものは、月明もよいが星あかりや窓の灯の仄かな明りくらゐで、しばらく眺むべきものである。障子一枚あけ、その一枚分だけのあかりが踏石をつたうて落ちてゐるのは、甚だ風致のあるものである。重々しくゆつたりした氣もちは夜の庭に

ある。いはんや涓滴の囁きがあれば庭のものが生きてくる事はもちろんである。涓滴は庭の呼吸のやうなものである。余はしばしば雨戸をあけて庭をながめてゐると、よく木といふものゝ寂しい正體を思ひやり、夜の中にも石の白いのを憐れむで見える氣になる。いはむや夜のしの竹のしげみを仰いで美しい葉の重なつた姿を見、その動きを見るときは少からず感心する。心なきごとく又心あるごとし。しかも茫々たる夜色の美しさは類もなく「夜の庭」を描いてゐる。

松ばかりを植ゑて夜半の夢にその砥ぐやうな松籟を聞くのも、中々に幽遠である。今も昔も松風の言葉古りてはゐるが、皓々たる音はいつまでも新しい。山松の葉の荒いのは冬の雪ごろには益々蒼く美しいが、寒さも一入感じるやうな松である。東京にある葉のこまかい上物の松は、ひ弱くたよ／＼してゐて好かぬ。霜に弱く風にも馴れてゐなくてすぐ古櫛のやうに葉が抜けてしまつて見すばらしくなる。

兼六公園には赤松が多く、雪時分の蒼緑はむしろ壯嚴に近いくらゐ、まるで照りで

もしてゐるやうに皓々としてゐる。雪が凍てついた中に松の葉並ががぢく／＼とツツ立つてゐて、それが融けると濡れて一そう蒼い。私は或る感慨に似た氣もちで、冬、金澤に行くと松を見てくらしした。かれらは年中陰鬱な雨とたゞかひ、冬は雪とたゞかつてゐるやうである。金澤の市中には折々老松が家の真中から屋根をつきぬけてゐるのがある。松を愛する情をもつてゐるやうに心もちがよい。だから人家が混んだ大通りのうしろに、もう松の木が車上から見える。松の木の都である。

みかんの木

だんだん畑の蜜柑の木に

あかつきの白雲かかり

黄ろい實の

世にとほとく洗はれ出でぬ――

かかる美しくしき實いかにの何せば生れしならん、

みなたわわになり

みなまことのころ湛へて

微風くればうなじ動き

あさ日にきらめく

砂白くかわきて

影はみなひと葉とて漏るることなく

こまやかに匂ひこぼるる

まことにこの木のかげに來れば

世はあかるく心晴れゆく。

童の群こどもむれてさわぐも

かかるころを解きてぞあらん。

あかつきに佛ほとけあゆむといはば

このみかんの木のうへに

その足音のあらなむ。

かく思ひてみかんの木にもたれてあれば

世の憂きころ早やも澄みゆく。

寒竹

寒竹のやさしい芽が茜いろに伸び

そのさきの方に二枚の新しい竹の葉がある

小春日のあさい日に透すいて

それはたぐひなく美しい。

冬の寒さにも劣らずによう伸びた寒竹

さういふわたしは古い古い日本のならはしを

いつの間にか心をやどしてゐる

庭をはくをんなよ

その芽を折らしてはならぬ。

憂鬱なる庭

春になつてから庭を毀すことが最初の引越しの準備であるのに、一日づつ延期してゐるうちに芽生えが彼處此處に青い頭を擡げ、一日づつ叡山苔の緑が伸びて行き、飛石のまはりに美しい緑を埋めてしまつた。樹や飛石、石手洗なども國の庭へ搬ばねばならなかつたが、芽の出揃うた鮮かさにはどうしても壞す氣にならなかつた。愛情といはうか執着と言つたらいいのか、ともかく自分は一日づつ延期しながらも、早く庭の物の始末をつけたい氣持を苛立たした。隅の方にある離亭も取毀して送らねばならなかつたが、大工や人夫の入亂れる有様、切角の芽先を踏みにじられることを思うて見ても、直ぐ取毀ちの仕事にかかる氣を挫かれ勝ちだつた。國の方の庭にこの離亭を移すと、國の俳人が月に一回ある筈の運座の句會に此離亭をつかふことになつてゐた大工等もその事で人を仲に入れて問合せて來たりしてゐるもの、氣乗りのしない幾

らか懨鬱になつた自分は、春雨の美しく霽つた叡山苔の鮮かさに見惚れながら、すぐ運送の手順に取懸かれさうもなかつた。

自分は茲二年ばかりの間に「庭」を考へることに、憂鬱の情を取除けることができなかつた。或時は自分の生涯の行手を立塞がれるやうな氣になり、或時はさういふ考へを持つときに、何か後戻りをする暗みの交つた氣持を経験するのだ。愛する樹々や石のすべてが何か煩さく頭につき纏うて、夜眠つてゐても其眠りをさまたげられるやうで不快だつた。自分は心神の安逸を願ふときには努めて草木庭園のことを考へないやうにしてゐた。自分は頭の痛む午後や、變に昂奮してゐる時などに、石や草木の幻のやうなものに取つかれ、腦に描く空想を一層手強く締めつけられて來るのだつた。夢にうなされ晝は晝で疲れ、草木や石はそれぞれに何か宿命や因縁めいた姿で纏ひつき鋭い尖つた枝枝が弱つた神経に障つてくることも珍しくなかつた。自分はかういふ境涯から離れたい爲に、つとめて自然の中に、庭園のまはりに近寄らないようにしてゐ

た。

併し自分のさういふ息苦しい思ひの中でも、習慣になつてゐるのか何時の間にか庭の中に出て、樹や石を愛し弄ぶの情を制することができなかつた。頭の痛むなかに伸びて尖端を觸れて来る樹樹の姿は、一層親密な運命的な勢力を自分の肉體の中にも揮ひ、自分は傷ついた氣持で殆ど引摺られるやうな状態で、これらの樹木や石に對ふより外はなかつた。かういふ珍しい氣持はあり得るものであらうか。

「童子」の庭

自分が此家に越してから八年ばかりになり、三人の愛兒を得、その一人を最初に亡くしたのも此家だつた。自分の亡兒を想ふの情は五篇の小説と一冊の詩集になるまで哀切を極めたものだつたが、併し誠の愛情には未だ觸れるに遠いやうな心持だつた。自分は「童子」といふ小説の中に可憐な一人の童が、夕方打水をした門のあたりに行んで、つくづく表札の文字を読むあたりから書き始め、時を経て、「後の日の童子」といふ作の中には、到底何物にも較べがたい自分の毎日の物思ひの中に、何時の間にか生きて一人の童子となつた彼を描いて、殆ど書き疲れ飽きることはなかつた。亡兒の事を書くことはそれ自らが、愛情の外のもので無いため、書くことに依つて濃かな愛情のきめを感じるのだつた。

自分は二十篇餘りになる詩をつくり、寧ろ綿綿たる支那風な哀切を盡したのも、そ

の亡兒への心残りの切なることを示したものだつた。亡兒と「庭」との関係の深さは「庭」へ抱いて立つた亡兒の傍は何時の間にか竹の中や枇杷の下かけ、或は離亭の竹縁のあたりにも絶えず目に映り、自分を叫び、自分に笑ひかけ、自分に邪氣なく話しかけ、最後に自分の心を搔きむしる悲哀を興へるものだつた。或日の自分は埒もなく疊を搔きながら死兒を慕ふの情に堪へなかつたのである。

さういふ「庭」は自分の考へをも育てる何者かであり、その何者かを自ら掃き清めることは喜びに違ひなかつた。自分はさまざま樹木や色色な花の咲く下草、亡兒の通ふ小さい徑への心遣りをする爲、冷たい動かぬ飛石を打ち、其處に自身で心待設けるところの淺猿しい人生の「父親」の相貌を持つてゐた。單なる樹木は樹木でなく、「子供」に關係した宿縁的なものだつた。庭を掃清めることは彼への心づくし、彼への供物、彼へのいとしい愛情、彼への清い現世的な徳と良心の現れだつた。自分は老いて用なき人のやうに庭に立ち、石を濡らし樹樹の蟲を捕除いたりするのだつた。事實

自分の妙に空想的になつた頭の内部には、それらの庭の光景は亡き愛兒の遺よふ園生のやうに思はれ、杖を曳いた一人の童子を何時も描かない譯にはゆかなかつた。自分の悲むで鶴の如く叫ぶ詩の凡ては毎日その一二枚あてづつの原稿紙に書かれて行き、自分が初めて詩の中に分身を見、詩中に慟哭したのも稀な経験だつた。

その詩や小説の中にある自分の悲哀とても、本當の突き詰めた氣持の中では到底さういふ藝術的な表現では決して満足されるものではなかつた。藝術の様式は遂に藝術以外のものでないところに、未練深い現世的な自分の愛慕が低迷してゐた。

自分が天上の星を見直或は考へ直したのも、その悲哀の絶頂にゐた頃だつた。深い彎曲された層の中にある生涯的な悲哀は、毎日自分に思ふさま殆ど人間の悲哀性の隅へまで苦苦しく交渉し、「烟れる私」をつくり上げるのだつた。顔の色の益々悪くなつた自分は決して笑ふといふことを、何物かに掠め奪はれてゐたも同様の空しさで、自ら烟れる如き凄しい顔容をしてゐた。

季節の痴情

自分は決して値の高い植木や石を購うた譯ではなかつた。寧ろ若木を育てた位で、高價な大物は植ふなかつた。些し許りの詩の稿料や他の小使錢を四季折折に使つた外は、殆ど餘財を傾けることはしなかつた。貧しいその日暮しの中から集めたものだから、賣ることになれば端錢にもならなかつた。と言つて此儘他人に譲り渡す氣にもなれなかつた。何故かといへば自分の愛園だといふ名目にしては餘りに貧しい木石の類だつた。せめて相應の石一つくらゐでもあればいいが、雜石をつかつた庭を他人に手渡すことは、末代までの名折であり、さういふ恥を残すよりも一草一石の端にまでも原形無きまでに取毀すことが、本統の自分の氣持だつた。

若し愛してくれる人があれば、この儘譲り渡してもいいと考へたこともあるが、後に残ることを考へると憂鬱になり、矢張り壞すことに心を決めるのだつた。それが自

分の一つの徳義でもあり良心でもなければならなかつた。自分を訪ねたことのある人の眼に残つてゐる小さな庭、庭らしい風致の中にある自分が、それ以上にその人人へ呼びかける必要はなかつた。深く取毀つて又新しく移らなければならぬ――。

自分が此庭を考へたことの最も烈しかつたのは、震災後一年を故郷の山河に起居してゐる時であつたらう、その時は庭などいらぬ氣持だつたが、安つばい郷里の貸家には砂礫が土に雜つてゐて、何を植ゑても根をおろすことがなかつた。柔かい黒土のある東京の庭を思ひ出したのは寧ろ不思議な思ひ掛けない切ない氣持だつた。自分は家の者に何かの序に季節ごとに庭の話を探返しては話出し、殆ど見るに耐へない庭があれ程心に残つてゐることは、意想外な氣持であつた。

歸京して見た昔の庭は庭のままだつたけれど、愛情は昔に倍してゐると言つてよかつた。彼等は穩かだつたし又静かさは一入深かつた。自分の最初に氣のついたことは庭の全面に漂ふ憂愁の情だつた。主人なくして過した一年の間に、彼等は茫々たる十

年の歳月を負うてゐる荒涼を持つてゐた。それは人間的な愛情だと言つていい位の静かな重い荒れ様だつた。自分が彼らの間に立つたときに自分を締めつけるものの多くを感じ、囁くものの哀切を経験するのだつた。自分は僅かな一草の芽生えの中にも自分が六七年近く愛した情痴を感じた。全く情を愛することも、文に淫することも凡て情痴に近いものだつた。さう言つても解り兼ねるかも知れぬが、實際人間同士の情痴以上の、重いものに心を壓せられることは愛する女以上の痴情に似たものだつた。自分が彼等の世界に住むことに頭を痛め心を暗くしたのも、それらが最早苦痛に近い楽しみであることも、やはり清浄であるために憂鬱になる情痴の表れに違ひなかつた。

田端の里

自分は殆ど庭の中に隈なきまでに飛石を打ち、矢竹を植ゑ、小さい池を掘り、郷里の磧にある石を搬び、庭は漸く形をつくつて行つたが、間もなく郷里にも庭をつくりかけた關係上、郷里の方にも庭木を送らなければならなかつた。さまざま煩雜さに疲れた自分は一層此庭を壊し、庭のない貸家に引移りたい望みを持つやうになつてゐた。何故かといへば愁に庭のある家に居ればそれに頭をつかふことは當然なことであるから、一層庭のないところに行けば諦めもするし、樹や石を弄ぶことも自然なくなるであらう、さういふ考へで何處かに荷物の全部を預け一家こぞつて旅行に出る計畫を立てたのであつた。併し自分の執着はすぐに庭を毀す決心はしてゐても實行は益益遅れがちになつてゐた。

自分が此田端に移つてから既う十年になるが、「江戸砂子」にある生薑の名所である

田端の村里は文字通りの田舎めいた青青しい生薑の畑と畑の續いた土地だった。根津の町へ出て藍染川となる上流は田端の下臺にあつたが、音無瀬川と呼ばれてゐた。名に負ふ煤と芥の淀み合ふ音の無い小川であつたが、それでも今の谷田橋附近は大根や生薑の洗ひ場になつてゐて女等の脛も見られる「江戸砂子」の風俗と俤とを昔懐かしく残してゐた。今の神明町車庫前あたりから上富士への坂の中途迄、秋風の頃はざわめく黍畑や里芋の畑の段段の勾配をつくり、森や林も處處に圓い丘をつくつて見えてゐた、小川や清水の湧く涼しい林もあつたが、今は待合や小料理屋が町家を形づくり昔の武藏野の風情は殆ど何處にも跡をとどめてゐなかつた。

それでも音無瀬川の溝石の仄ぐらい濕りには、晩春初秋の宵などに蛙の啼く聲も聞かないではなかつたが、若い椎の植木畑や生薑の畑には昔のやうな螢の飛び交ふ微な光りさへ見られなかつた。十年の間に變つたものは單にこれらの郊外的な風致や町の姿ばかりではなく、兒を失ひ悲むだ自分には溝川のほとりを散歩しながらゐる姿は昔のやうだつたが、もう子供が二人も生長してゐた。

植木屋の多い田端の地主らも時勢と金利の関係から、植木屋は賣減らしにして何時の間にか貸家を建て、新建の小路をつくり、殆ど空地は見られない程だつた。秋口には涼しい高い木に啼く蟲の類も減つたばかりでなく春先の鶯が啼く朝などは年に一日か二日くらゐに過ぎなくなつた。以前は何處からともなく春を告げる鶯の聲を聞くのは毎朝の快いならひであつた。生温かい雨の霧あかつた朝の食卓についてゐて、鶯を聞かない朝はなかつた。それなのに今年には鶯を聞かなかつたといふ年も近年になつてから折折に聞くやうになつてゐた。

記 録

自分の家や庭の客となる人人は、矢竹の茂りと音とを賞めてくれたが矢竹は庭一面に這出して相應の風致を形作つてゐた。一年の間に主人を三人まで持った秋といふ女中も、自分の家を出ると不幸續きの暮しをして今では行方が分らず、彼女が風呂敷に包んで買つて来た小さい沈丁花は、六年の間に自分の背丈を越えるまで伸びてゐた。次に来た女中の里である茨城の草加在の珍しい土賊の株も、庭の一隅に固く組み合せて、年年殖えて美しくなる一方だつた。彼女は自家から暇を取るとカフェの女になり、これも亦行方が分らなかつた。

季節折折の子供の病氣の時の看護の女、植木屋が人代つてゐたそれぞれの記憶、國の母や兄、老俳友などの泊つたことのある離亭、飼猫や飼鳥の山雀、或時は仕事に疲れて卒倒しかけたことのある庭の奥、さういふ小さな覚えは一つとして「庭」を離れ

たものではなかつた。「庭」は彼らしい人生観めいた記録的なものを持ち、それらが今庭を壊さうとしてゐる自分に小癩なほど叙情詩めいた詠嘆の心を移さうとするのだつた。殆ど隅隅にまで手の觸れないところの無い庭土は、それに手をつけた日の記憶的な位置を今更らしく思ひ出させた。

この家に来て自分の仕事をした数は、文字通り枚舉に暇が無いくらいだつた。詩集「高麗の花」や「田舎の花」「忘春詩集」を書き、「童子」「嘆き」「押し花」「人生」「我」と人のこと」「わが世」等で亡兒に對する嘆きの限りを綴つたものである。その他數十篇の小説物語の類は自分でも覚えてゐない夥しい数だつた。どこの雑誌に出たかも分らず、それを捜し出すこともできないで散逸された小品隨筆の類は、殆ど数限りのない位だつた。さういふ反古同様の仕事に注いだ自分の制作的な情熱を考へるだけでも自分は何か目當もなく茫然とし、その情熱の費消によつて十年は命を縮めてゐると言つてよかつた。それすら自分には何一つ残つてゐないことを考へると、情熱を賣買

した天壽の制裁の空恐ろしさを思はない譯にはゆかなかつた。
 自分は第一流の文人である自信はあり實力もあるのだが、併し自分の書いたものが秋風の下に吹晒され、しかも残らないことを考へることは苦しかつた。自分にさへ其行衛の判らない原稿のことや雑誌のことを思ふだけでも陰鬱になり息窒る思ひだつたその頃に書いたものの心の持ち方の低さ、氣持の張りの足りなさを考へると訂正削除の朱筆は動かしてゐても、自分の文章や意嚮の拙劣さを犇犇と感じられるであつた。或は却て原稿が散逸された方がよかつたかも知れない。悪文十年の罪を失した宜い機會であるかも知れぬ。唯自分はそれらに注いだ取り返しのつかぬ情熱の濫費だけは何と言つても一生の過失だつた。どういふ時にもよい仕事をするには、永い安心を形づけるものであり、朝朝の寝ざめを清くするものであるが、いい加減な仕事をした者の末路は自分で氣の附く時は、もう遅いに違ひない、併しその遅い時期に踏止まることも亦肝要なことに違ひなかつた。

別
れ

自分は或日、まる一日外出をする機会があり、その間に植木屋に命じて樹木の幾株かを荷造りさせて、國へ送るのであつたが、幸ひ自分の歸宅したのは夜に入つてからだつたから、其樹木を抜いた跡は見ないで済んだのである。次の日にも外出の折を見て飛石を抜き、又次の日にも石を搬ばせるように命じて置いて何時も夜になつてから歸宅するのだつた。雨戸を開けることがないので、庭の様子は分らなかつた。寢床で想像する淋しい庭のありさまは誰かを怨みたい氣持だつた。

築庭造園は財を滅ぼし、人心に曲折ある皺を疊み込み、極度に清潔を愛する者になることは事實である。自然に叛逆することは、自然を模倣すると同様な叛逆だつた。彼は「庭」を造らうとしながら實は「自然」を造らうとするものらしかつた。そこに何か突詰めると淺ましい人間風な考へがないでもなかつた。それだから面白いといふ

築庭的な標準は、自分には既う亡びかかつてゐる考へであつた。それなら自分は後の半生を何に費したらいだらうか？——自分の如きものの才能は何に向つて努力すべきだらうか、かういふ消極的な問題を自分の中に持出して、自分は荒れた破壊された庭の中を歩いて見たが、何か永い間に疲れたものが抜け切つたやうな、それこそ精神的な或平和をさへ感じるのであつた。その感じは自分を一層孤獨な立場に勇敢に押出してくれ何よりも平穩と潤達とを與へて呉れた。小さな風流的な跼蹐から立ち上つた自分の行手は、寧ろ廣廣とした光景の中に數奇ある人生的な庭園を展いて見せてゐた自分はその庭園を見ることに泉のごとき勇敢を感じた。自分はそれ故今は眼の前で此小さな「庭」の壊されることを希望し、過去の庭園に靜かに手を伸べてその姿に別れを告げるのであつた。

曇天的な思想

何時か自分は「過去の庭園」を物してから、庭を壊し離亭を取毀したが、いまは一草一木も無くなり、明るい空地になつて了うた。自分の氣持は爽快になり頭は輕くなつた。矢竹も掘り盡したが筍が處處に餘勢を示し、根に添うて残つてゐる。

自分は庭を壊して見て埋られた飛石は勿論、凡そ石といふ石の數の多いのに驚いた位である。雜石をあしらひ急仕立に自分の氣持を紛らはしたその折折の、自分の氣持の低さには熟熟呆れるばかりだつた。庭などといふものは決して間に合せの石や樹を植ゑて置くものではない。それは必ず棄てなければならぬ時期があるからである。周到な注意と懇切な愛好の下に、生涯それらの木石に心を寄せるほどのものを選ぶべきであつて、いい加減な選擇は嚴格に退けるべきであつた。

自分は庭を壊しても決して淋しい思ひはしないばかりか、何か前途に最つと好い庭

がありさうに思へるからである。庭はそれ自身が東洋の建築としつくり色を融け合せて生きてゐるもので、決して庭だけで生きてゐるものではない、東洋の寂しい建築と其精神とに彼は其姿を背景とせねばならぬ。建築の淋しい哀愁を飭るものは、女人のやうに優雅な、しかも健康な「庭」でなければならぬ。誠に美しい庭に立つことは我の愛する女人と半夜を物語ることに、どれだけでも隔つてゐるものではない。

自分は梅雨曇りが廣がつてゐる中に、毎日のやうに其美しい曇天を眺入つてゐた。その中に壊された庭を少時思ふに適した。折折の低い雲、蒼い空をも眺め、どうやら自分がこれから後にめぐり會ふべき。石や木、庭のありさまなども好き想像のうちに描くことができた。そして自分は半年ばかり極端に質素な、往昔の文人が試みた旅行のやうなものを實行するために、家具を友人の家に預け、永年の埃や垢を洗はうとするのである。文人の榮華の醒めた不況の時に昔の生活を抛つことは、自分の好みにもあひ、今はその「時」を得てゐるからである。それ故自分は曇天の中に美しさを知る

ことも、人一倍の熱情を感じるからである。

自分のやうな人間は何かしら「心」で翻弄する物の要る種類の人間である。詩や詩情をいぢることに倦きてゐないが、同様に戀愛にも未だ飽きてゐない、戀愛的な雰圍氣は決して女人の間にはばかりあるものではなく、その正確な精神は凡ゆるものの美しさを詳かに眺め取入れることであらう、曇天も陶器も又女人もその内の重なるものであらう。

荒土になつた庭の上に、杏の實が、今年もあかあかと梅雨曇りの中に熟れてゐる。

此杏は家に附いてゐる樹であるが、毎年春は支那風な花を見せ、何時も今頃の季節には美しい實を見せてゐた。今日も机の上から見る朱と黄とを交せた杏の實は、堪へがたい程美しい。自分も家の者もこれを取らうとはせず、此儘次ぎに越して來る人の眼を楽しませであらう。

杏は國の方にも今頃は熟れて輝いてゐるが、東京では滅多に見られない。何時か小

石川の或裏町で見かけたことがあるが、その美しさ豊さは莫大な印象だった。子供の時にその種子を石で磨つて穴を開け、笛のやうに吹いたことを覚えてゐる。「杏の笛」と言ふと幼い詩情を感じることが夥しい。今も郷里の童子はその「杏の笛」を吹くことを忘れないであらう。

矢竹は國の庭へも送つたが、根は庭ぢうに這ひ亂れてゐた。森川町の秋聲氏からの使ひにも數株を分けたが、使ひの植木屋はかういふ美しい竹は植木屋も持つてゐないと褒めてゐた。自分もさういふ褒言葉を喜ぶものである。初め辻堂の中村氏に約束をしたが、辻堂までの車を仕立てることは困難だった。中村氏の庭を訪れた秋聲氏との間に竹の話が出たものらしかった。

自分は初め此矢竹を青山といふ禪客から譲り受けたものである。今度は色色手分けして預けたが、雨が多く分け切れなかつた。關口町の佐藤君からの植木屋も、漸つと今朝になつて分けた竹を掘りに來た。ともあれ自分は後二日で半年の旅に出るのだ

が、あとを亂したくないので土の穴や掘り返しを埋めさせてゐて、微妙な哀愁を感じた。多くの秋と冬の夜、これらの竹の葉擦れの音を聴いたが、春の深いころと晩秋の頃とが一番葉ずれの音がよかつた。皮を剝いで膏で拭いた幹は青く沈んだ好い色をしてゐた。芥川君は此竹のある方を何時も「窓の穴」と言つてゐた。同君の庭にも竹があつたが二三日續いで庭を掃いて見て、氣持がよかつたといふ話も耳に残つてゐる。

震災の時にも上野あたりからの灰が吹かれて、葉の上に白く埃をためたが、さういふ思ひ出も却却忘れられなかつた。自分は毎年筍が出ると、古竹を粗い簾に編ませ、それを煤の垂れる軒に吊るして置いたが、野趣があつて粗雑な感じではあつたが好きだつた。

織部の角燈籠

此間購ふた織部の角燈籠の胴に六體の佛を刻んであるのが、片曇りの空模様の中によい調和で浮んで見えた、氣が沈んでゐるのか何時もほど楽しくは見られなかつた。垣の外には何時の間にか通行人が來てゐて庭の中を見てゐたが、私の顔を見ると黙禮をしたきり、熱心に燈籠の佛の彫刻に見惚れてゐた。

私が此の織部を選んで購うたのは、その佛の彫があつたからである。雨に濡れると佛は石面に浮きあがつて見え、その百年くらゐある古さが私に馴染みをもつて、心に近づいて來てウツトリした氣持にならせた。

梅と硝子戸

冬になると私の家の二階に隣の家の梅の老木の枝が、硝子窓にすれすれにさわり、その固い蕾を次第にふくらがしてゆくのが机の上から見えた。春は梅も櫻も李も一時にひらく國では、梅の咲くころは春の最中と言つてもよいのだ。

私は或朝、その硝子戸にさわる小枝のさきを鋭い、何か撥きつける感じを受けた。蕾が開くときは見えないが、さういふものを蕾を見てゐると感じるのだ。

牡丹

自分の家の庭にある美しいものは牡丹の大株だった。姉、兄の嫁、辯護士をしてゐた家の娘さん、片町のお幸、兄の二番目の嫁、姉の友達、それから小さな妹、さういふ人々が臙脂色の牡丹の花と關聯され、自分の頭の中にそれぞれ特異な印象を残してゐた。牡丹は瘦せた枝を冬は束ねられた儘、雪の下積にされてゐたが、自分は牡丹を寒からうと懸念してよくその凍えた雪の中から掘り出したものだつた。さういふ二月ごろは牡丹は芽を包んだ南京玉くらゐある、疣のやうな芽含みを表はし、自分は鳥渡嬉しい氣持でその芽に觸れて見るのであつた。

家の庭から川岸に出られるやうになり、川岸は人家の裏になり、空地を二町ばかり土手が續いてゐた。菓子屋、石鹼屋、八百屋、豆腐屋、土木へ勤めてゐる家、紺屋、竹屋、それらの裏口は淋しい毀れがちな灰ばんだ板圍ひを川に向うて開き戸を構へて

ゐた。子供達は土手の上で遊び、土手の石垣にはさまざまな古い株の雑草が絡みついてゐた。

自分はその土手に出られる背戸の板戸を記憶の中に残し、杉垣の暗い茂りに残る雪を春遅くまで感じてゐた。姉が洗ひものに川へ下りるのも、その板戸をくゞつて出なければならず、自分は何やら姉が愛想に話しかける言葉を、何時も朽ちた板戸のほとりに感じてゐた。隣の菓子屋で焚く餡の匂ひも、暖かい日には殊更に胃液を刺戟した、も一つ菓子屋の庭には杏の老木があつた。それは美事な遠火事のやうに見える一杯の花を着けて擴がり、その屋根の底は見えなかつた。雛時分、雛菓子の飾られる店さきには此家に娘がゐなかつた、めか、子供心に自分には淋しい感じを感じてゐた。

鶏頭

澄江堂主人の部屋には真紅に燃えた鶏頭の半折が、その雄健な筆力を輝かしてゐるとさかが虹のやうに紫ぐんで見える。隆一書と書かれてあつた。——ひるさがりの庭へ出たらしい子供の太鼓の音がきこえる。

「君はまだ見ませんかね。」

主人はさう言つて縁側へ出た。黄葉まじりの櫻の枝越しに主人の愛兒が巴模様の太鼓を叩いて、いぢらしく青苔を踏みにじつてゐる。家の中から女らしい聲で子供のあとを追ひ乍ら呼ぶこゑがした。主人が子供を呼ぶ間もなく、子供は階下の軒下にかくれてしまつた。

午さがりの日かげが、障子に暖かくさしてゐる。れいの櫻の枝越しに斑らに落ちた日かげの、先刻の庭苔のことを私は考へてゐた。そのとき主人は、「君のところに花を

活けてあつたことを一度も見ることがありませんね。」と思ひ出したやうに言つた。

「このごろはよく花を室に置いてをきますよ。」

實際これまで私は花を活けたことはなかつた。が、亡兒の忌が明けても、この頃は妙に花を活けるくせがついてゐた。

話頭がしぜんに轉じられた。主人は石印を一つ取出して、指頭で撫で乍ら氣に入つたら進呈しようと言つた。

名園の落水

曇つた十月の或る日。

いつか見て置きたいと思つてゐた前田の家老であつた本多さんの庭を見に行つた。誰かに紹介をして貰ふつもりだつたが、それよりも直接にお庭拜見といふやうに名刺を通じた。五萬石を祿してゐた本多家はいまは男爵である。幸ひ取次ぎが出て来て、大變荒れて居りますが御案内いたしませうと言つて先きに立つてくれた。

門番の壁のところには玄徳槍が二本と櫓の六尺棒が、埃まみれにむかしのままに立掛けてあつた。近ごろ経費を締め手入れをしないので荒れてゐるからと取次ぎが言つた。奥庭へ廻ると雨つづきの、たつぷりした池の水が曇つた明るみをうかべ、不意にわたしどもが庭へ出たのに驚いたのか、灰いろをした大きな鳥が古い椎の木の茂みからふうはりと翅つて池の上をななめに淡淡しく掠めた。五位鷲だなと思つた。池の向

ふは松と椎と楓とで暗くじめじめと繁つてゐた。老俳友の南圃さんが何日か金澤の庭のなかできじの啼くのは、本多さんのお庭だけだ、一度見ておきたまへと言つたことを思ひ出した。そのきじの啼くだけのことさらにわたしにすいせんした南圃さんの心はすぐわたしに入りかねたが、このごろになつて古色蒼然の悠大を知つたわたしは南圃さんのその心もちを會得して、成程なあ南圃さんくらゐの年になれば古色蒼然の悠大をひとりで解るのだと思つた。兼六公園にさへきじの聲は聞かれなかつた。しかも本多家はいま此の屋敷に住んでゐないので、池の捌け口のさらさら流れるあたりにも、芝生や苔のある樹の下にも落葉だらけであつた。右手寄りの池の椎の暗みを土塀へ通じて藪があつた。その青い竹の肌だけが灰白い土塀をうしろにして、葉や枝を椎の茂みに覆はれてゐる姿が風雅だつた。

「あの藪から池のうしろへ廻れますか？」

「このとほり打つちやつてありますから、それに露でたいへんでせう。」

それでもわたしは藪の中の小徑から廻つて見ることにした。池が曲つた楓のかけに十一重の圓笠の石塔があつた。まる彫らしいのが十一重の明暗を塔ごとに蒼くろくしきつて、寂かに露をあびて立つた姿が落着いてよかつた。あたりの小徑は見分けがたいほどの落葉に埋れて、じめじめと柔らかくわたしの下駄を浮かした。

老いた樹が多く奥の方は暗かつたので、池の前へ取つてかへし、三太夫に池の正面の椽の高い屋敷を見せて貰ふことにした。前田から本多家へ二度も嫁入りしたことがあつたので、この屋敷をそつくり嫁入道具として持つて來たのであると言つて、百疊ばかりの部屋を見て廻つた。床の間のある部屋には御簾の釘跡があり、園の中壺に櫛を箆め込んであつた。すべてが總檜の建物で中中美事であつた。わけてふしぎなのは襖の手かけに五分四方くらゐの穴があいてゐて鍵のやうにかつちりと開いたり塞いだりできる覗きがあつた。むかしはその穴から次の間に立聞きなどしてゐはせぬかといふ用意のために、それを拵へたものらしかつた。十六瓣の菊の紋章がその取つ手の中

に、小さく塗金色に鏤ばめてあつた。

「これが廁でございます。」

廁は二疊敷でむかしは疊が敷いてあつたさうだが今は板じきで、次の間がついてゐる。——壺には蓋がしてあつて止り木のやうな取手がついてあつた。三尺障子が二枚うす曇りの明るみを靜かにはらんでゐる。——わたしは當然想像すべきことをわたしの頭から追ひ拂ふことにした。

この部屋からは先刻の庭が一望される……奥ほど大木の茂りを見せ、前ひろがりに明るみを引き、樹を低く池を中心にした庭は、兼六公園のところどころにあるかなめに似てゐた。それゆゑ同じ庭づくりの系統をひいてゐることが分つた。流れには土に食はれた石にもいい姿をしてゐるのがあつたが、大したものになかつた。成程古い。しかもその古さは荒れてゐる。荒れかかつてゐるのは人工を加へないで、自然に荒れてゐるのが氣もちよいと思つた。

本多邸を出て兼六公園へ行つて見る気がした。いつも東京からの客の案内役をしてゐて一人でゆつくり行つた事がないからである。翠瀧の洲にある夕顔亭に李白の臥像を彫り出した石盥があつた。水はくされてゐて蟲が浮いてゐる。お取り止めの石ださうであるが、蒼黒い肌をしてゐて一丈くらゐ廻りのある大椎の立木の影にあつた。瀧壺のすぐわきにお亭があつた。お亭の下は池の水が瀧の餘勢で弛く動いてゐる。お茶をのむためにむしろ冷爽すぎるお亭の中へ這入つて見た。十年前に一度這入つたが、いまが初めてでめる。池の中洲に海底石の龕塔が葉を落した枝垂櫻を挿んで立つてゐる。それを見ながら横になつてゐると、瀧の音とは違ふ落ち水のしたたりがお亭の入口の方でした。小さい崖になつてゐて丸胴の埋め石へ苔からしぼられた清水が垂れる些やかな音だ。そこは四尺とない下駄をぬぐところである。よく見ると白い寂しい茸が五六本生えてゐて、うすぐもりの日かげが何時の間にか疎いひかりとなり、藪柑子のあたまを染めてゐる。これはいいなと思ひ、わたしは龕塔の方へ向けたからだを

落水の方へゐなほした。そのとき一丈三尺の龕塔の頂上の一室に何だか小さい石像のほとけさんが坐つてゐるやうな気がして、また首をねぢむけたが、そんなものがゐる筈がない。寂然と四方開いてゐて、松の緑を透した空明りが見えた。秋おそく落ち水聴くや心訝ゆ……でたらめを一句つくり茶をのんで、けふは實に悠悠たる日がらだなと思つた。

瀧の落ち口のお亭の前を通つたときに、この春芥川君が来て泊つたお亭を覗いてみたが、秋深く松葉が散らばり二三本の篠竹の青い色を見られる格子戸に、人のけはひすらしなかつた。亭亭たる松の梢にある飼箱に群れる小鳥の聲がするばかりであつた。このお亭にこのごろ泊つたら寒からうと思つた。

曲水のほとりには水もうつくしくながれ、玉石の敷かれたあひだを喜んで上る目高が、群れてあるひは雁行してゐた。わたしはむかし歌合せなどの催しのあつたらしい此の曲水が好きだつた。石の姿や、その石をつつんでゐるつつじをながめてゐるうち

石のしたに敷島のからが流れてゐるのを悲しく見た。が、つづじの抜き枝や、圓物づくりの姿のくづれたのが氣になつて、何故手入れをしないのかと考へた。そしてこれが自分の庭だとしたら、終日あほらしい顔をして此處に佇つて、水の動いて流れるのに倦きることはないだらう。水の流れるのは浅いほど美しく表情も複雑であどけなく思はれるが、深い水は何か暗澹として掻き曇り、心におしつける重りがかかるものがあつた。それにくらべると曲水は古いがその感情は新鮮である。手を入れて掬ひたいやうだつた。石と石との間に決して同じい姿をしない水のながれに、いい着物のひだなどみる媚びた美しさがあつた。古い言草で飛んでもない思ひつきだが、水はいまさら美しいと思つた。

卯辰山の見える廣場のベンチに近在のものらしい小娘と老母とが、鹽せんべいを嚙つてゐる。そのあたりに紙屑や吸がらなどが散らばり、芝は剥げ落ちそこだけ新開地のやうな荒れてゐる風致であつた。それも小汚なく東京くさく荒れてゐた。——そこ

から霞ヶ池への道路、だだつ廣い空地の芝草もあとかたもなくなつてゐた。しかもその荒れた有様を取り止めやうとしてゐない。名園を守るに市役所や縣廳のともがらに委せておけないやうな氣がしたが、しかしわたしはそれを嘆くだけである。わたしの役目を嘆くより外にはない。——霞ヶ池は老松にかこまれ、蒼くろく鱗波を掻き立てながら曇天の下にあつた。だが、五位鷲やきじの啼く聲はなかつた。あるは水すましが水の面をすべるくらゐである。わたしたちの子供のときよりか松も大きくなつたらうが、景色はこのあたりが一番古びて行つてゐるやうに思はれた。龍のひげがさう青青と池のまはりを幾段にも椽取つてゐる。その藍いろの實を拾ふために子供が二人群れてゐる外、池のまはりには人がゐなかつた。松と苔の公園は至るところに荒廢の跡が著しかつた。

池に面した傘山といふのは、もう奇岩怪石の跡はあつても、苔はむしられ石は亂れた姿のままであつた。そのまはりの松や楓の大木、その木の間を透く池の面のどんよ

りした冷たさはよかつた。幼時の折、何の仕草もなくこの山の頂にある傘の形をした友待風なお亭で、ぐるぐる廻る傘を廻したものであつたが、あたりの皮のむけた赤土を見ただけでやはり荒れてゐると思つた。

そこを下りて噴水のある小さい流れへ出たが、その小流れはつつじの茂りで隠されて了つて、音だけが配石の間から潺乎として聞えた。或ひは少しの音すらないところがあつたりした。石は苔でつつまれ指さきでも搔けぬほどになつてゐた。——もとの翠瀧のほとりへ出て夕顔亭の落水を餘處目に見ながら公園の坂を下りかけたが、

「あの落水は公園で一番いいところぢやないか。」

さう思ふと、名園を背景にしたせいであらうが、あんな下らない落水が自分の心を惹くのも、あのづから自分にふさはしい好きなどころを選んだのだと思つた。しかもそれは古くからあるのでなく、恐らく夕顔亭の主人がこさへたものであらうと思つた。わたしはもう一度佇つて其處の小さい崖と、落水の音を聞いた。

菊に就いて

大貳行政はお城の勤めを廢めて、城外の暖かい村里に住んで、色々な珍らしい牡丹と菊の苗を蒐めてゐた。牡丹と菊の苗や芽を得るためには高い金を抛つことも考へなかつた。

或晩、ふと南山の麓によい菊の苗を持つてゐる人が住んでゐることを聞いて、翌朝まだ旭の登らぬ前に城外にある南山のふもとへと志ざした。南山は暖かい日あたりのよいところで、どういふ苗でも好く育つところであつた。

折柄、南山のふもとは、春のさかりで、佳い匂ひ、好い色の雜つた美しい村落が暖かい日に抱かれてゐた。大貳は垣根や圃や庭などを覗いてあるいて、珍らしい五葉の黄花や、鳳凰の苗や、また亂菊のこまかい株の生えてゐるのを眺めて、それを自分で育てたいと思つた。

或る一軒の茅葺の家の前で、大貳はうす暗い茶の間を覗き込んで訪れた。家の中から白いものが動いたかと思ふと、それは穏かな顔つきの、温良しさうな一人の若い娘さんであつた。

「わたくしは菊の苗を好いてそれを咲かせることを楽しみにしてゐるものですがお宅の庭にある菊の苗を少しばかりお預けをねがへませんでせうか。」

娘は明るい土間へ出て來たが、明るいために却つて美しく見えた程であつた。

「どうぞお好きなほどお持ち下されませ。わたくしどもでは人手がないものですからそのまゝに打つちやつてゐるのでございます。」

大貳は喜んで頭を下げた。

「ではお庭へ廻つてもよろしうございますか。」

「どうぞ入らして下さい。わたくしも参りますから。」

娘は大貳をあんないして庭へ出た。

菊は花の形を思はせるやうな美しい芽と葉とを擴げて、あたたかい日の中に伸びあがつてゐた。大貳は二株の菊を藁苞につつんで、娘にあつく禮を述べ、紙に包んで幾千の金を渡さうとしたが、娘はその白い手を出さうとはしなかつた。

「さういふものを戴くつもりではありません。」さう言つて受取らなかつた。

「ではわたくしのお禮心をどうしたらいいでせう。」

大貳はさう言つて美しい娘の顔を見つめたが、見るほど、美しさの増すやうな顔つきであつた。

「ではかうなさいまし。秋になり菊が咲くやうになりましたら、わたくしを招びに來て下さいまし。わたくし、それをお待ちいたします。」

「けれどもあなたのお父さまがそのとき貴方をお止めになつたらどうします。」

「いいえ、わたくしは弟と二人きりで住んで居りますので、そんな御心配はいりません。」

大貳は、それでは仲秋の彼岸の日にはきつとお迎へに出ますと言つて、娘と別れた別れぎはに大貳は娘の名前を聞くことを忘れた。

大貳は歸りの道で、一人の少年が蓬の束を擔いで山麓の途から歩いてくるのを見つけた。少年はふしぎさうに大貳の顔を見つめたが、大貳は言葉やさしく尋ねた。

「あそこの茅葺の家の娘さんの名前をあなたは知つてゐますか。」

しかし少年は笑つて急に答へようとはしなかつた。大貳の提げてゐる菊の苗を見詰めてゐるばかりであつた。そして反對に少年は大貳に問ねた。

「その菊の苗はどうしてあなたの手に入つたのです。」

「これですか——」大貳は嬉しさうに笑つた。

「これはあの茅葺の中の娘さんから貰つたのです。お名前を問ふことを忘れてしまつたので、いま君にたづねてゐるやうな譯です。」

少年はなほも笑ひながら、黙つて田圃道をかへつて行つた。どうも能く背てゐると

思ふたが、娘は弟と二人だと言つた。あるひはその弟かも知れないと思つた。

暫らくして振りかへると、少年は茅葺の家の中へ這入つて行つた。大貳は道理である少年は笑つただけで黙つて行つたのだと思つた。

大貳行正はその秋は苗の葉を一枚づつ植ゑて、庭ぢう珍らしい菊を作つた。ひとつの菊の花は孔雀の尾のやうに垂れ、色は黄と金粉とを交ぜたやうな色であつた。も一つの花はつばくろのやうな深い紫紺で、揚羽蝶のやうな大きい花瓣であつた。この菊はゆつたりと咲いて、そよ風の吹くごとに佳い匂ひがこぼれた。さうして日の當り具合でふしぎに色が變つて、或ひは虹のやうに見え、どうかすると玻璃のやうにも光つた。

町の中にある菊好きの人々は、よい日和をさいはひ、この大貳の庭の菊を見に来て感心した。

「あなたはどうしてそのやうな菊を見つけたのです。」

さう尋ねても大貳は黙つて答へようとはしなかつた。町のひとびとは菊作りには菊苗の出どころに秘密のあることを知つてゐたので、それ以上尋ねようとはしなかつたが、みんな感嘆して、

「どうか一枚でよろしいからその葉を分けてください。」と言つた。

「花が濟んでしまつてからお上げしませう。」と、大貳は約束したのだつた。

大貳は或るとき、ふと、南山のふもとの娘さんが、花が咲いたら迎へに来てくれと言つたことを思ひ出して、きうに迎への駕を用意したのだつた。暫らくすると迎への駕は空しくかへつて来て、

「どう捜しても南山には姉弟の住んでゐる家なんてありません。それにお宅にあるやうな珍らしい菊なんぞ村中さがしても見つかりませんでした。」さう言つて何かの間ちがひではないかとも言つた。

「いや慥にわたしはその家をたづねたのだ。ではわたしが行つてさがして来よう。」

大貳は南山のふもとへ行つて見たが、もと尋ねた家らしいものは見當らなかつた。唯、それらしい家の跡には焼石がころころ轉がつてゐるばかりで、何一つ昔ながめた庭らしいものはなかつた。大貳は近隣の家でたづねて見ると、附近の人はふしぎさうに、

「今年の夏に焼けてしまつた家ではないでせうか。」と言つた。さう言へば樹も石も焦げて悲しげな焼跡であつた。

「あるひは焼けたのかも知れませんが、それにしても姉弟のひとはどうしたのでせうか。」

「南山の山あひに村があつてそこに住んでゐるといふ人もありますが、たしかかなことはわかりません。此處は南山の出入口になつて居りますが、まだ誰もあの人たちの姿を見たものがございません。」と村の人はこたへた。

大貳は南山の山あひの村へまで行き、さがして見たが、やはり姉弟の姿はなかつた

日がくれて大貳は自分の家へかへり菊の花を見てみると、れいの美しい娘さんの顔がぼんやりと思ひ浮んだ。

「あなたがたは一たいどこにゐるんですか。わたくしはけふ一日あなた方をさがしたのです。」大貳はさう言つて物悲しげに菊の花に手をふれた。月のない空に好い匂ひがながれてゐた。

明るい晝さがりであつた。

大貳の門の前で女駕が一挺、しづかに着いて、垂れをかゝげて美しい娘が出て、小さい履ものをはいて立ち上つた。大貳はあわてて迎へに出た。

「あなたでしたか？ よくこそ来て下さいました。」

大貳はさう言つて、娘の白い顔を見て、一たい人間はなぜかうまで美しくなれるのだらうかと思ふくらゐ、その美しさに呆れて眺めたのであつた。

「わたくしはけふは菊を見にまゐつたのでございます。駕がお宅のちかくに来ると最

う佳い匂ひがしてわたくしはどんなに嬉しかつたか知れません。」

娘はしづかに言ふのであつた。

「きのふわたくしは南山のふもとを捜して歩きましたが、あなた方のおところがどうしても分らなかつたのです。」

娘は笑つてこたへた。「わたくしはいまはあそこには住んで居りません。」

大貳はさういふと娘はあたまを振つて、そんなことはこれから一切おたづねになつてはいけません。どうかそれをお誓ひくださいましと言つた。大貳はさういふ娘の言葉に何故か凜としたものを感じた。

と、斷乎として言つた。娘は庭へ出て菊の花があたゝかい日の光のなかにあるのを見て、

「大そうよく育ちました。これでわたくしも嬉しうございます。」

さう言つて新しく葉と莖を柔らかい土の上に挿木した。

「これは來年になると咲きます。しかし、あなたはこの菊を誰にも分けはしないでせうね。」

「今までに一度も分けたことなんかありません。」

「どうぞ分けしないで下さいまし。わけるとあなたのところの菊は絶えてしまひますから。」

娘はさういふと閑かに立ち上つて、かへり支度をした。大貳はその容子を見てゐると、どうも人間よりも別なものに見え、人間よりも遙かに清い何ものかを感じるのだつた。大貳は駕のところの菊を一枝挿して、お禮心を表はすことにした。

「ではわたくしはこれで参ります。決してわたくしのあとから尾いていらしつたりしはなりません。」

娘はさう言つて、小さい履物を忘れて脱いだ。

「あなたはこれからどこへ入らつしやるのです。」

大貳はふしぎさうにたづねた。

「わたくしわたくしの菊の畑にかへるのですよ。」

彼女はそれだけ言つて、駕の垂れを下げて門を出て行つた。

美玉の王

或日、出入の炭屋の主人が、一鉢の菊を搬んで庭に置いて行つた。白い大輪が三花鳳凰のやうな瓣を盛り上げてゐる。雪よりも白い。わたり八寸ぐらゐあるが、まだ咲き切つてゐないところから見ると、咲き切つたらさぞ見事であらう。

「芽が出ましてもよそへお願ひにならないやうに願ひします。わたしがこの菊をわけて貰つたときにも決してよそへ分けない約束をしたものでございますから。」

そして菊と云ふものは、葉一枚を千切つて去られても、その翌年は立派に花まで盗まれる。だから葉の數まで讀んでおいて、會などに持ち出すのですとも言つた。

添竹にも黒い塗がしてあり、はりがねで花輪の支へがしてある。——いつも黙つて炭を切つて行くこの主人にこんな風流があらうとは思へなかつた。そしてしつこく芽をよそへ分けてくれると言つたことや、その妙に祕密めいた育て方も私には興深い

氣がした。芽が四散すると珍らしい菊の名が失せる。だから自分だけがそれを持つて居やうといふ氣もちが、さもしくはあるがそれだけ頑固なだけ別に悪い氣がなかつた。

「美玉の王といふんです。——」

さう言へば。象牙のやうな冷徹した花輪は、どこか王冠のやうに美しい嚴つさを有つてゐる——。

黄の豆菊などは、硯や印材や筆や、さういふものに何となく品のよい調和を有つてゐるものである。が、この美玉の王はふしぎに大きな壁とか床の間、あるひは縁さきなどに好ましい置所を感じさせる。漱石は菊は影がよいと言つてゐたが、實際大輪の菊がゆれる影は見事である。「日はくれぬ鱒なほ干すせんだらの暗き垣根のしら菊の花。」といふ白秋の歌にも、なほ亂菊的儼たる野趣をかんじられる。

私の國では屋上に菊を作り、天水をもつて葉を洗ふ風習がある。主として商人がする閑暇な風流心である。

寒菊

寒菊や芋屋の裏の吹き通し、名吟にあらざるも凡夫の句にはあらず。冬の日に寒菊を眺めるは清らかに雅眉めきたるものなり。束ねしまま籬越しに寒ささびしくて蕾のまま開かざるもよく、壺中にしてなほ枯れたるはその埃ばめる景色とともに賞づるに足るべし。寒菊の束ねしままに枯れにけり、とは予が幼時の句作なり。予のいまひそかに思ふは寒菊の文字面まことに枯淡にして好ましく、端然たる内になほ一味の風色は媽たる一趣を含めるが如し。以て寒菊の文字面をも愛する故ならんか。

寒菊や粉糠のかかる白のはた、まことに藁三五本も零れたるべしと古き評釋本ならば添書すべきところなり。蕉翁の句をまねたるにあらざれど、予が幼時に、たんぼぼの灰あびしまま咲きにけりの一吟あり、寒菊に作意の跡ありといはば、たんぼぼにもなほ歴乎たる斧鑿の痕あるべし。故に予が心は寒菊に就ては野趣を外にして眺め之無

かるべしと思惟するに至れり。されど床上古備前を置き寒菊を投げ活けんにはなほ寂落たる風致を呼ばんか、恐らく古備前の竹のやに青く吹きたるものと兩兩相俟ちて風流これに及ばざるものあらんと思へり。又ひそかに思へらく一壺の寒菊の眺めに二百金の鍋島甍せんを撫愛するごときに殆ど均しと。またときに食後の番茶一碗の熱きを快く味ひたる如きと相似たり。まことに寒菊は愛すべきかな。

予が愚妻の姉なるもの古流の師匠なり。たまたま床上に要らざる風流を物し、ときに搓牙たる梅擬を壺中に活けて去れり。予は生け花を好まずこれを隣室に搬び、寧ろ自ら缺して梅擬を挿しぬ。内心思へらく予は予の風流は却つて彼女の花技を超えたりと自重せり。彼女は或る時二階に上り来て予が生け花を一瞥せるが、莞爾して亦語ることなかりき。予彼女に予の投花の技は奈何んとたづねしに、この梅擬はしんを缺めてあり、しんを止めたるはだめぢや、らちやかんと言へり。しんを止めて何のわるきものを思ひしが、日を経るにしたがひしんを止めたる梅擬は花の頂の枝を切りたるごと

きものなるを氣づき、なるほど予が風流はいまだ堂にいらすと思ひ、次に來しときに梅擬はしんが必要なりと言ひ、そこそこに笑ひすましぬ。何事も一技に老けたる人はおろそかにすべきものにあらざと思ひ至りぬ。

寒菊やここを歩けと三俵、こは漱石の句なり。又味はふべし。要するに寒菊はこれ野趣といへども荒蕪に走らず、さ庭べに寂然とこそ眺むべきものなり。凡て冬咲くものの内蘖を以て圍ひたるものは皆風流なるものなり。水仙、冬ばら、椿の花、山茶花茶の花、石路、寒梅、尾花、——木ならば柳の枯れたるもの、實殻鳴る桐、約繩せる庭松、寒竹の圍ひたるもの、もしくは行く秋も梢に残る柿一つのごときまで、もろもろの趣味深く古雅自から親しまるべきなり。就中蘖を以て圍ひたるものの何となう暖かき花など着けたらんこちし、立ち出でて蘖よりさし覗き見るなどして興趣多きものなり。

水仙花

十二月下旬もずつとつまつたころに、わたしの父はわたしに毎年のやうに上等な玉露を買ひにやらせた。正月の用意のためである。その歸りにも一つ花屋へ寄ることも殆どならはしになつてゐた。冷たい水仙を二三株提げてわたしは雪の大橋をわたるのだつた。北風の欄干のすき間に蒼い河波がさむざむと心を冷した。その使ひは毎年きまつてゐたのも今から思ふと懐しい氣がする。

——今日、わたしの部屋の床の間に、その水仙が三花生けられてある。雁行するやうな活花の式は何流だか知らないが、けさ女が生けて行つたのである。——漱石は菊より菊の影がよいと感想文に書いてゐるが、この水仙のすらりとした葉並みは、うすずみで描いたやうに影が美しい。訪ふ人もないときには私はよくこの影が中に瞳を落してゐる。わたしの小説や詩もいつも影のやうな描き方が多い。つとめてさういふも

のを書かうとする氣もちではないが、己れの好きに心がやどると云ふことは仕方のないことだ。

この三花交形の水仙にも、珠だけな美しい影がある。わたしの父はさういふ思ひを抱いてゐたわけではなからうが、年すくないころのわたしはただ冷たい花だと思へなかつた。しかし今のわたしには別な思ひがひそんで離れない。支那水仙の黄色八重の花より、一花一重のきよらかな日本の水仙がよい。陶器でいへば青磁のやうな透明な感じである。青磁は形態から飽きても質から飽きるものではない。水仙もそれと同じである。日本に詩文に今水仙のやうなものを書きうる人はないやうな氣がする。去年この水仙の球を十ばかり埋めて置いたが、今年は一つも芽生えがしなかつた。球根が腐つてしまつたのか——それとも土を踏み込んだせゐかも知れない。しかし水仙は野に置くべきものでなく、むしろ床の間に點すべきものである。しづかな品格を持つた花であるから——。

つるもどき

梅擬の枝は參差たるものだが、つるもどきは同じ參差たる趣があつても、じたいが蔓草だけにどこか蜿蜒としてゐる。金澤ではやまがきと言ひ、その實が柿の實のやうな澁い色と形をしてゐる。大きさは朝顔のたねくらゐで、室に入れて活けると茶褐色の皮が撥いて蟹の子のやうな朱玉を露き出す。はなはだ枯淡な味ひで朱きが故に艶麗に走らずまた下品な情致がない。これは掛け花活に挿すのにちやうどいい。東京のつるもどきと言ふのは外皮がなくて、枝に刺がある。あるひはさいかち茨の實ではなからうかと思つてゐる。こちらのつるもどきは室内の温氣にふれさせないで檐に吊して正月の花にするなら、皮は撥かないでそのまま保つさうだ。室内に入れて初めて皮を破るのは、甚だ微妙な氣がするではないか。——

はじめ私は晩これを活けて置いたが、翌朝になると外皮から朱い玉がはじき出てゐ

て、餘りに美しいので喫驚りしたくらゐだつた。氣のせいか昨夜ねざめに何か花のはじく音をきいたやうな思ひがしたのは、あながち古い二階家のどうかすると音のする故ばかりではなかつたらう。つまり寝てゐる間にこんなに美しい實が皮から飛び出したのが非常に愉快な氣がしたのである。

むかしむかし或るところに一人の女がゐた。そして此のつるもどきの掛け花瓶の床柱の下で、何か考へ込んで冬の日の暮れがたにぼんやり坐り込んでゐた。この女はまだ二十か二十一くらゐでかなりな美人らしい。その證據には俯向いた横顔が肥らず瘠せず、と言つてもたつぷりとあごさきには肉があるのだ。さう言へば前垂れがけの膝がしらには、いかにも下町ものらしい艶かさがあつた。あたりに人はゐない。雪は小歇みなくむしろ静かすぎるほど外の面につきもり、そのためにも却つて温かさうで烈しい寒さがしない。娘は何を考へてゐるのか？ それは分らない。ただ能くわかるのはその右の手の指さきが、古風なしなやかさで何か一つの玉を弄くつてゐることだ。そ

れは誰かの袂にでも觸れて落ちたつるもどきの一粒だらうか？ その色が朱いためにさう思はれないこともないが、それにしても先刻からしてゐた琴の音は一たい此の家誰がひいたのであらう。この家には中年の母おやと二人きりだから、この娘を置いて他に誰も琴を弾いたものは居ない。それではあれは琴爪かも知れないぢやないかと人人は言ふだらう。しかし琴爪はちやんと漆塗りの箱にまだ蓋もしないでをさめられてある。——ではこれは一たい何を弄くつてゐるのだらう。……だが、最う暮れかけてゐるので、いまはその朱い色さへよく分らなかつたのである。

至聖林

お隣りから懸崖作りの菊一鉢を戴いた。至聖林、曲阜孔子墓畔にてと、附木の一札がある、たんぽぽを豆菊にしたやうな花で、葉はからくさのやうに細かく優しい。今春支那から持つてかへつたものらしく、清楚で、染附物の圖柄を眺めるやうな氣がする、やはり晩色の、沈んだころにその細かい葉の影が美しい。

寒竹

朱塗の籠にゐる小鳥を楓の枯枝に掛けて置いたら、うすれ日があつた。そして寒竹の芽が尺餘のかげを引いてゐる。

「僕のやうに妹や父母や子供などの大勢の家族のあるものには、かうして庭を眺めてゐるといふ落着いた氣もちは極くすくない。」

萩原は寒がりらしく瘦せた手で、羽織の紐を弄くつてゐる。田舎にゐるかれが静かにしてゐられなくて、俗塵裡の私の生活を羨しがるのは、私の最も意外にかんじたことだつた。

「では仕事はどこでするんだ。」

「市中で部屋がりをしてゐて其處へ毎日行くのだ。」

庭ではもう芭蕉も破れ、枯れ葉をそよがせてゐる。火鉢を置かない部屋はつめたい

縮れた秋寒むがする……。

「昔は水さへ撒けば生えるのかね。」

「日光の射すところが却つていいやうだよ。」

萩原は、利休燈籠の下に青い苔のある縁さしを覗いた。そこにある壺まで青く蒸しついで、濕つた匂ひがしてゐる。

冬すみれ

——かう書いただけでは分らない人があらう。寒中の、雪が二尺くらゐ積つてゐるここに、私は冬すみれの紫濃いつぼみを見出してむしろ呆然とした。それは日あたりのいい石垣の、石と石との間にこんもりと青い葉をならべた莖の幾株かが、時しらぬげに可憫にも寂乎として縁深く構へてゐるのだつた。これを仔細に見ると角力取花とも言ふほど普通のすみれより花が大きい。——童子らはこの花のうてなのところにある瘤のやうなものを、花と花とを組合はして引つぱり合つて遊ぶものだ。クローバの葉と葉を海鼠廻しのやうに叩きつけると同じである。

私ははじめこんな寒いときに花などを着けてゐないだらうと思つた。それにも拘はらず此のすみれは青いぢけた幾重にも緑の表皮につつまれた蕾を大切さうに葉のかげに潜ませ、いくらか羞かしげな容子をしてゐた。私はそれに指をふれて見たが、内

部はふうわりとして且ついくらかの温かみが含まれてゐさうにも思はれた。こころみにその蕾を破つて見るなら、まだ紫には間のあるうすあかい色の花瓣が、幾重にも累なり包まれてゐることに気がつくだらう。——私はそれを一度見てから、よく日あたりのよい石垣の中をさし覗いて見て歩いたが、なるほど蕾を持つたのが極く稀れだつた。たいがいは凍えた青い葉を覗かしてゐるに過ぎない。それにしても私はものの眞實さといふものを能くこの冬すみれの花に眺めた。北國のつねとして雪の下には落の臺や土筆や嫁菜が春いち早く萌え出すのだが、それは北國地方ばかりでなくとも、東京の野にも見られるところである。しかし冬すみれは寒い國の特有のものに違ひないと思つた。あんなに人知れぬ間にこつそりと蕾は持つてゐるが、その蕾のまま凍え上つて咲かずにくされてしまふすみれは、まつたく可愛いものの極致だらう。

再び竹に就いて

竹は畫けるごとく缺するべし。珊々たる又斑らなる竹枝の根元に一石を配すべく、一石の面に水のしたたり溜れるは嬉しきものなり。わが庵の竹を剪り明りを透したるに、葉と葉の累なりしもの隔れ、枝と枝と交へたるもの自ら二三枝を數へるごとくなり。曇天のもとに光らずに揺れうごきて静かなり。しかも古き竿枝を剪り今年竹をのみ立てたるなれば、清楚にて閑寂の趣あり。一雀の走るありて忽ち竹枝たわわとなる去るを見ればなほ寂然として音あり。竹を愛する我は雅びたる詩人にあらず、俗腸錢餘を算ふるの人なり。さればこそ竹の樹てるに蹲踞み揺れるに従つてなほ左傾するの所以なり。

竹の皮を剥げば節と節との間詰りて、風致いとしき姿を爲すと云ふ。されど我庵の竹は篠竹なれば屋後に綠叢を仰ぎ見るべく、いまだ皮剥ぎたることなし。——その影

の壺に射しくるときは秋近くなるべく、庭石の上にあるときは冬の日の温き午後なり煙草して影を見るべき我はすでに老いたるにはあらず、心そのやうなるものに眺め樂しむの齡を知れるなり。げに思ひがけなき樂しみの我が上に訪れ來しものかな。などと書きつづらば犀星既に老いたりと言はん。されど我がごとき一介の痴人のかくまでに樂しめるを母など聞きたまはんには、よしとこそ言ひたまはん。まこと母親にあらずして誰人にこの事を告げんものぞ。

その日われペンをとらんとせしが、竹を剪れる震へありてペン握らん事をよう爲さず。文字ふるへて悲し。まことにすむるたる青竹の凍たるを鉄するとき、音してひびき手中の肉をふるはすなり。そのふるへ停まり去ることなく、ひしひしと痛めり。食事にもなほ箸とらんとして震ふ。青き胡瓜をいくたびかわが膝の上に落せり。

「いかにして何時にもなきことをしたまふぞ。」
「手のふるへるなり。竹は剪るものにあらず。」

かく山妻に告げてなほ手の震へるを止めんすべなし。出でて竹を見れば青きすむるゐたる竿枝の、その尖端になほ一滴の翠餘走れる如きを覺ゆ。手に觸れて見て愛でさする心地す。

竹は庭の隅に配すべく、或ひは圓窓聯櫛窓に位置すべし。石手洗を置くによく、又藪柑子梅擬の紅き珠つづれるを雜へたらんにはなほ風雅なるべし。竹林中亭を建ててはよけれど、そはあまりに贅深なり、己れ貧しくてなほ竹を植ゑるはよし。錢餘りて竹屋敷をつくれといふ某といへる畫人にはくみせず。凡て分に過ぎず目立たぬ贅澤こそ奥床しきなり。庭に百金を投ずるはよけれど、金銀に千金を棄てるは好ましからざるなり。——寒竹は芽筍かたけのこを愛すべく、篠竹は荒き音こそよけれ。熊笹はぞくぞく生ひ繁りたるは賞翫すべきなり。

閑暇ありて淺草の割烹に遊びしが、石を埋めたる熊笹の緑みを潔よく青かりき。すなはち一枚づつ拭き清めたるもののごとし。かくのごときまで注意深く竹は愛すべく

その緑は保護すべきなり。それも今はもはや昔の夢とはなりたりけり。わが庵の竹も亦をりをり打水などして、煤多き都の風に吹き枯れんことを恐る。まことに朝ごとに煤ほこり黒すみて葉の上にある。打水して清むるなり。

野茨の實

金鋼の籠の中で、山雀が荐りに止り木を叩いては麻の實を碎いてゐる。そしては柔らかい殻の中の實を啄つてゐる。——その窓の下に野茨の赤い實を生けた染附の壺と篆刻の印材や銅印を集めた紫檀の箱と、硯箱のかげに硯のあることは言ふまでもない——私は折さへあれば壽山岩と黄白の蠟石を骨董店から購つて来て、それが集まるのを見て楽しんでゐる。

名の知れない暇つぶしに彫つた石印などを見てゐると、世の中に何一つ興味おもしろいことのない人間が、半ば相悲しみながら春の日に刻んだ印面が、踏みにじられた花のやうに歪んで映つて来る。又は何處までも世の中に逆生して行かうとしてゐるやうな放膽なものもある。概して支那人の刻はゆつたりとしてゐる。——靜かに眺めてゐると面長な馬のやうな顔が私と同じい石印をさし覗いてゐるやうな氣がするのである。一

つの石印を彫るのに、十度印面を砥にかけてもなほ氣に入らないことが多い、さうかと思ふと鑿を持つてから卅分もすると齧^かたげに彫り上げてしまふことがあるさうである。

山居悠々として自適するに

春窓既に更け

日として鳥語なき日なし。

人生の事みな失意、

されど失意を思はず

獨座春蘭を嗅ぎつつ送る。

誰か一顆の石印に思潜ますことを知らん、

昨日印面に睡し

今日なほ刻に執す、

まことに山居訪ふ人なく

流水桃木に夢むのみ。

これはでたらめに書いたのである——が、それさへ何んだか私には妙な詩より自分にはふさはしいやうな氣がする。

庭と木

昭和五年八月二十五日印刷
昭和五年九月一日發行

定價金六十錢

著作者

室生犀星

印刷者兼
發行者

前田信

小石川縣高田豐川町四三

著者の
捺印を
請す

發行所

小石川區目白臺
振替東京六七一四六

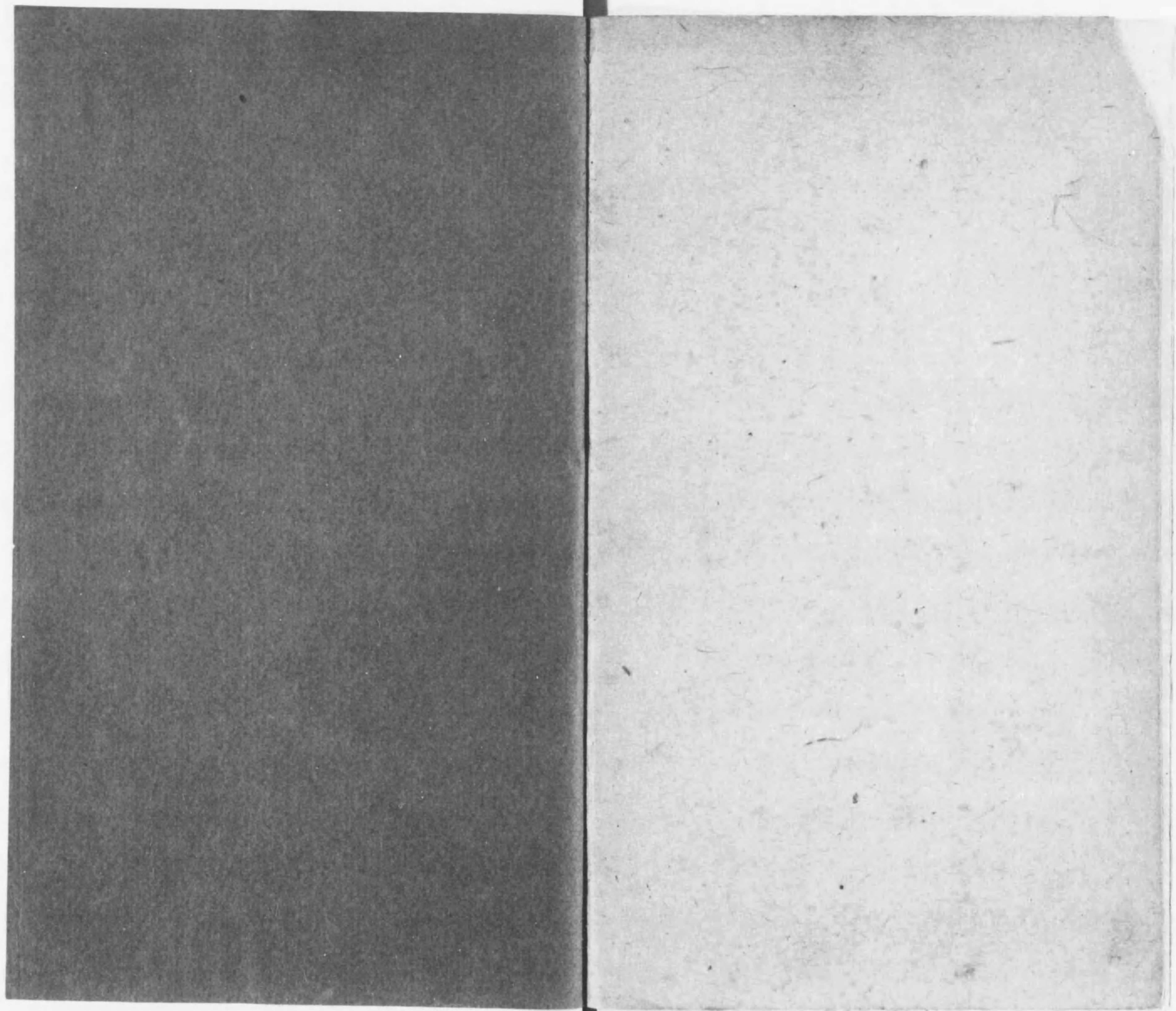
武藏野書院

東京樂文社印行

武藏野書院刊行

室生犀原著
 ・芭蕉襟記
 ・魚眠洞發句集
 ・魚眠洞隨筆
 佐藤惣之助著
 ・釣りと魚
 佐藤春夫著
 ・車塵集
 長與善郎著
 ・一人旅する者

稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
十二	十二	十五	十二	十二	十二
二	圓	十	圓	圓	圓
錢圓	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢



357

304

終